

神崎町羽黒遺跡

— 県単道路改良（一般）委託埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成24年3月

千葉県 県土整備部
財団法人 千葉県教育振興財団

こう ぎき は ぐろ
神崎町羽黒遺跡

— 県単道路改良（一般）委託埋蔵文化財発掘調査報告書 —



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第678集として、県道郡停車場大須賀線建設に伴って実施した、神崎町羽黒遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

羽黒遺跡の調査では、古墳時代後期を中心とする竪穴住居跡や土坑などが発見されるなどこの地域の歴史を考える上で貴重な成果が得られました。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願ってやみません。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成24年3月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 赤 羽 良 明

凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による県道改良工事（一般）委託（埋蔵文化財調査）県道郡停車場大須賀線の改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県香取郡神崎町大貫1165-2ほかにある羽黒遺跡（遺跡コード 343-002）である。
- 3 発掘調査から報告書作成にいたる業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査研究部長及川淳一、北部調査事務所長野口行雄の指導のもと、主席研究員池田大助が下記の期間に実施した。
発掘調査 平成23年8月8日～平成23年10月5日
整理作業 平成23年10月1日～平成23年12月15日
- 5 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県香取土木事務所、神崎町教育委員会のご協力・ご指導を得た。
- 6 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行「佐原西部」1/25,000 (NI-54-19-9-2)
- 7 本書で使用した航空写真は京葉測量株式会社 昭和42年 1/13,000を使用した。
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北であり、日本測地系に基づいている。
- 9 遺物の色調については、農林水産省・(財)日本色彩研究所監修、日本色研事業株式会社発行「新版標準土色帳」（1988）掲載の用語に基づく。
- 10 本書で使用した遺構の略称は以下のとおりである。
SI：竪穴住居跡 SK：土坑 SH：掘立柱建物跡
- 11 本書で使用した遺物出土状況の凡例は以下のとおりである。

○土器 ■石製品 □鉄製品
赤彩  黒色処理 

目 次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査の方法	3
第2節	遺跡の位置と環境	3
1	遺跡周辺の地理的環境と層序	3
第2章	検出された遺構と遺物	6
第1節	縄文・弥生時代の遺構と遺物	6
1	縄文時代	6
2	弥生時代	6
第2節	古墳時代の遺構と遺物	6
1	竪穴住居跡	8
2	そのほかの遺構と遺物	30
3	石製品および鉄片	35
第3章	まとめ	39
1	隣接遺跡について	39
2	古代の羽黒遺跡について	41

報告書抄録

挿図目次

第1図	遺跡の位置図および周辺遺跡分布図	2	第13図	SI-003B・C号竪穴住居跡出土遺物(2)	23
第2図	遺跡と周辺地形図	4	第14図	SI-004A・B号竪穴住居跡実測図及び出土遺物 (SI-004・SK-005)	26
第3図	遺構分布図及び下層確認調査状況図	7	第15図	SI-005・006号竪穴住居跡実測図及び出土遺物 (SI-005・006・SK-010・011)	28
第4図	SI-001号竪穴住居跡実測図・遺物出土状況図	9	第16図	SI-007号竪穴住居跡実測図及び出土遺物	29
第5図	SI-001A・B号竪穴住居跡カマド実測図・出土遺物(1)	10	第17図	土坑及び掘建柱建物跡など	32
第6図	SI-001B・C・D号竪穴住居跡出土遺物(2)	11	第18図	土坑及び掘建柱建物跡周辺出土遺物	33
第7図	SI-002号竪穴住居跡実測図・遺物出土状況図	14	第19図	遺構外遺物及び出土石製品(1)	36
第8図	SI-002A号竪穴住居跡出土遺物(1)	15	第20図	出土石製品(2)	37
第9図	SI-002B・C号竪穴住居跡出土遺物(2)	16	第21図	出土石製品(3)	38
第10図	SI-002C号竪穴住居跡出土遺物(3)	17	第22図	石枕出土古墳分布図	39
第11図	SI-002C号竪穴住居跡出土遺物(4)	18			
第12図	SI-003A号竪穴住居跡実測図及び遺物出土状況・ 出土遺物(1)	22			

表 目 次

第1表	主要周辺遺跡一覧	5	第6表	SI-004号竪穴住居跡出土遺物一覧	25
第2表	住居一覧	6	第7表	SI-005・006号竪穴住居跡出土遺物一覧	27
第3表	SI-001号竪穴住居跡出土遺物一覧	12	第8表	SI-007号竪穴住居跡出土遺物一覧	29
第4表	SI-002号竪穴住居跡出土遺物一覧(1)	19	第9表	土坑一覧	31
	SI-002号竪穴住居跡出土遺物一覧(2)	20	第10表	土坑出土遺物一覧	34
第5表	SI-003号竪穴住居跡出土遺物一覧	24	第11表	掘立柱建物跡・遺構外出土遺物一覧	34

図版目次

図版1	郡遺跡及び周辺航空写真(昭和42年)S=1:13,000	3. SI-001B号竪穴住居跡遺物出土状況(西から)	
図版2	遺跡遠景・周辺状況	4. SI-002A・B・C号竪穴住居跡全景(北より)	
図版3	1. SI-001号竪穴住居跡遺物出土状況(北から) 2. SI-001B・C・D号竪穴住居跡全景・遺物出土状況 (東から)	図版5	1. SI-002A号竪穴住居跡全景 2. SI-002A号竪穴住居跡カマド遺物出土状況
図版4	1. SI-001A号竪穴住居跡完了 2. SI-001A号竪穴住居跡カマドセクション	図版6	1. SI-002B・C号竪穴住居跡全景(北から) 2. SI-002C号竪穴住居跡遺物出土状況(北東部) 3. SI-002C号竪穴住居跡杯集中出土状況

- | | | | | | | |
|-----|--|------|-------------|-----------|-----------|-----------|
| | 4. カマド付近遺物出土状況 | 図版10 | 1. SK-001 | 2. SK-002 | 3. SK-005 | 4. SK-008 |
| | 5. 南壁付近遺物出土状況 | | 5. SH-002 | 6. SK-011 | | |
| 図版7 | 1. SI-003A・B・C号竪穴住居跡全景（北から） | 図版11 | 羽黒遺跡出土遺物（1） | | | |
| | 2. SI-003B号竪穴住居跡全景（東から） | 図版12 | 羽黒遺跡出土遺物（2） | | | |
| 図版8 | 1. SI-004A・B号竪穴住居跡・SI-007号竪穴住居跡全景（北から） | 図版13 | 羽黒遺跡出土遺物（3） | | | |
| | 2. SI-004A号竪穴住居跡遺物出土状況（北から） | 図版14 | 羽黒遺跡出土遺物（4） | | | |
| | 3. SI-007号竪穴住居跡近景（北から） | 図版15 | 羽黒遺跡出土遺物（5） | | | |
| | 4～6. 遺跡調査風景 | 図版16 | 羽黒遺跡出土遺物（6） | | | |
| 図版9 | 1. SI-005・006号竪穴住居跡全景（北から） | | | | | |
| | 2. SH-001・002ほか土坑群（北から） | | | | | |

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

千葉県香取土木事務所は、香取郡神崎町において県道郡停車場大須賀線の改良工事を計画した。

この事業にあたって香取地域整備センター（当時）は千葉県教育委員会に対し事業予定地内に所在する、羽黒遺跡の取り扱いについて協議を申し入れ、平成22年12月に教育振興部文化財課による現地の試掘が実施された。この試掘調査において、竪穴住居跡と想定される遺構の存在が複数確認された。その結果発掘調査による記録保存の措置を講ずることで協議が整い、財団法人千葉県教育振興財団が千葉県香取土木事務所との委託契約を締結し、発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は平成23年8月8日より実施され、対象面積の700㎡を全面調査することとなった。台地西側および南側は土取りなどによりすでに削平されており、調査区内においても崖面が崩落しており樹木の生える平坦面がひさし状に残されるなど縁辺部分においてはかなり危険な状態となっており、安全範囲を確保したうえで調査区を設定した。

整理作業は一部発掘調査と平行して開始し、10月中に水洗～注記、接合を完了させ、11月には実測、トレース、遺構図版、12月には遺物写真、挿図、原稿を完了させ、1月初旬に入稿を完了し、1月～3月に校正・印刷を完了させた。

2 調査の方法

700㎡と狭小であり、事前の試掘で竪穴住居跡と考えられる遺構が検出されているために対象範囲全域を調査することとし、今後の残される地点をも含む形で40m×40mの大グリッドを設定した後、大グリッドを4m四方の小グリッドに100分割し、北西隅を00とし南東隅を99として小グリッドを全域に設定し、グリッド単位で掘り下げを行った。

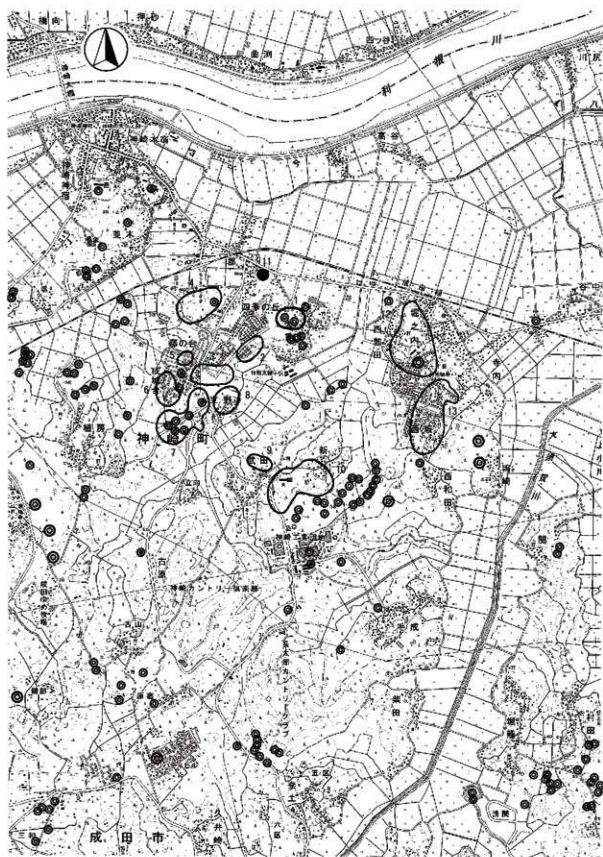
調査着手時点で相当の密度で雑木が密集しており、伐木、抜根には残された遺構への影響をできるだけ少なくする形で注意を払い作業を進めたものの、表土除去の進展により、竪穴住居跡ほか遺構が密集しており、調査を進めるにつれ、かつての開墾、開発事業による攪乱もかなりのものであったことが知れた。

調査区周辺はかつては畑としての開墾地とされていたこと、昭和50年代前半に土取りが行われた時に本遺跡地内を掘削機械が走り回ったことなどが当時の関係者の記憶から知ることができた。

本遺跡から検出された遺物はその全量は少ないものの縄文時代早期三戸式～田戸下層式土器が検出されており、また弥生時代後期の土器、古墳の石室の残片と考えられる砂質安山岩石片などが残されていた。

遺構は古墳時代後期を主とした竪穴住居跡15軒を主として構成される集落跡であることが明らかとなり、周辺において調査されている集落とともに郡を構成する集落であったろうことが推測された。そのほかに掘立柱建物跡2棟、これは小規模な建物であり集落に付随する施設であろうか。土坑は12基を数えるが、遺物を伴い集落時期と関連あると考えられるものは5基あり、ほかはその時期は明瞭とならなかった。

旧石器時代については、遺跡内に2×2mのグリッドを4か所設定（調査対象面積の概ね2%）して、



第1図 遺跡の位置図および周辺遺跡分布図

下層の確認を実施したが、ローム層は薄く（第3図）おおむね40cmで砂質粘土層となった。本遺跡内においては当該時期の遺物の検出はみられなかった。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡周辺の地理的環境と層序（第1・2図・図版1）

本遺跡の所在する香取郡神崎町は千葉県の北西部に位置し、古代より水運あるいは常陸への水上交通の要所であったことが知られている。遺跡の立地する台地は北総台地の北端部に位置し、周辺は台地奥部より流れる大小の河川により複雑に開析された樹枝状の台地が現利根川に面して数多く広がっている。遺跡はこれらの台地の一つの最先端に位置している。

神崎という土地を古くから代表し、歴史に名を残しているのが神崎神社である。神崎神社の創建は社伝によると白鳳2年（673年）常陸と下総の境界にある大浦沼の二つ池からこの地に遷座したという。古くは小松社とも呼ばれており、樹齢2,000年ともいわれるクスノキが国の天然記念物として知られており、通称「ナンジャモンジャ」の木として著名である。

この神崎町は周辺地区と比較して遺跡の密度が濃く、縄文時代早期の貝塚として知られる西ノ城貝塚をはじめとして、縄文時代前期の植房貝塚などがよく知られている。これらの成果については早稲田大学により行われた利根川下流域の調査においてその成果が公表されており、上記遺跡のほか、中期から後期にかけての貝塚が報告されており全国的にもよく知られている遺跡も多い。

弥生時代の遺跡については本遺跡においても同様であったが、遺物が検出されるものの利根川に直接面する遺跡からは大規模な集落として報告されているものは見受けられない。羽黒遺跡と同一遺跡ともいべき仲台遺跡から1軒、神崎町毛成地区に所在した館山遺跡から竪穴住居跡が22軒、方形周溝墓1基の調査が行われているのが最大である。

古墳時代になると遺跡は増大する。第1図は羽黒遺跡とその周辺に所在する古墳時代から奈良・平安時代とされる遺跡および周辺の古墳について記載したものである。古墳は台地上のみならず台地直下の微高地であったと思われる地点にも築かれており、古墳時代に入ると周辺の台地を含めてかなり大規模な開発が展開したと考えられる。その特色としては別途記すが石枕を持つ古墳の集中地点でもあるということがある。郡遺跡と同一の台地上に所在したと考えられる古墳出土と伝えられる伝大貫地区出土の石枕をはじめ、出土地不詳、個人蔵などを数えると相当数の検出が知られる。直近の発掘調査による成果をみると、平成14年に調査が実施された北の内古墳がある。羽黒遺跡の北西隣の台地先端に位置するやせ尾根上に構築された古墳で、長方墳であったとされた。主体部は2基、1号主体部からは銅鏡、2号主体部からは石枕をはじめとして立花・直刀・石製模造品多数を出土している。

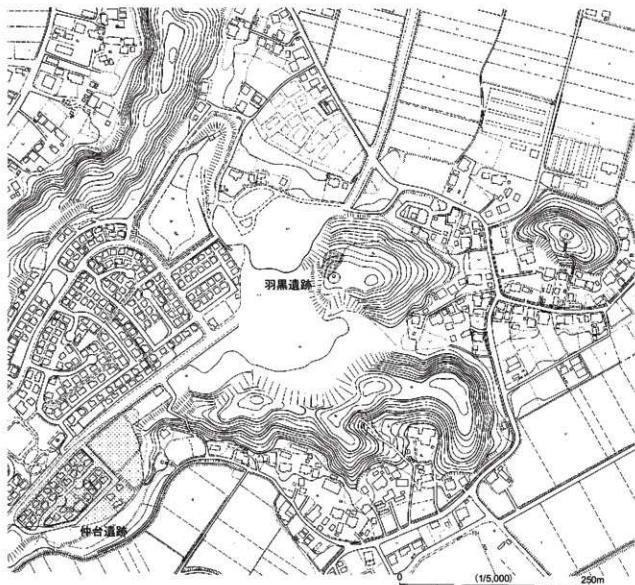
この北の内古墳をはさんで西側には遠台遺跡が存在し、地区名は字「郡」となる。古くより香取郡衙所在地に比定されてきている場所であり、この遠台遺跡は散布する遺物も古墳時代～奈良・平安時代までの遺物がみられることから、郡衙関連遺跡であろうと推察されている。この時代になると神崎神社自身が歴史資料として日本の歴史に現れる。『日本三代実録』（陽成天皇）元慶3年（879年）4月5日に、「下総国正六位上の子松神に従五位下を授ける」と記載されておりその存在が裏付けられる。

また古代の支配が崩壊するとともに香取神宮領として、また平安時代に入ると当地は近衛家の荘園としてその庇護下に入り、現在に残される香取神宮関連の文書において、中世におけるいくつもの歴史的事例

を提示するなどの貴重な資料を残している。

その後中世に入り、千葉氏一族の支配下に入り周辺の台地に砦が築かれる。多くの古代の遺跡が中世の砦の造成によって影響を受けていると思われる。戦国時代を経て、江戸時代には当遺跡の直下、字大貫地区に大和郡山藤堂藩の陣屋が置かれた。

近世に入ると利根川を利用して盛んになった水運・流通を利用して、酒造業が発達していくものの、物資の集積地として佐原地域の整備がなされてゆくと、その主な役割を佐原に譲り渡していったのである。



第2図 遺跡と周辺地形図

第1表 主要周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	調査歴など	千葉県遺跡 地図番号	遺跡番号
1	羽黒遺跡	古墳時代竪穴式住居跡15軒、掘立柱建物跡2棟、土坑15基、伝石枕出土(2011)	神崎町 №18	54
2	仲台遺跡	弥生時代竪穴住居跡1軒、古墳時代竪穴住居跡41軒、奈良・平安時代竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡2棟、土坑2、柵列1条、中・近世道1条、溝23条(1982~84)	神崎町 №18	60
3	上人塚遺跡	縄文(前・中)時代、縄文土器(関山・加曾利A)(1984)	神崎町 №18	63
4	遠台遺跡	縄文時代(前・中)、古墳時代(前・後)、縄文土器(植房・加曾利E)、土師器	神崎町 №18	48
5	中田遺跡	奈良・平安時代、土師器、須恵器	神崎町 №18	61
6	立野西遺跡	方形周溝墓1基、古墳時代住居跡3軒、奈良・平安時代住居跡14軒、溝7条、土坑多数(1984)	神崎町 №18	65
7	堀込遺跡	7世紀後半方墳2基他3基、6世紀中頃竪穴式住居跡3軒など(1988)(2001)	神崎町 №18	71
8	上ノ台遺跡	奈良・平安時代、土師器	神崎町 №18	72
9	後輪ノ内遺跡	縄文時代(前)、奈良・平安時代、縄文土器(黒浜)、土師器	神崎町 №18	78
10	大平遺跡	奈良・平安時代、土師器、須恵器(1985・86)	神崎町 №18	128
11	北の内古墳	古墳1基墳丘は長方墳か、主体部は2基、銅鏡、鉄製品、石枕、立花、滑石製模造品、勾玉、ガラス玉白玉、土師器、須恵器等出土(2002)	神崎町 №18	15
12	堀之内遺跡	円墳、箱式石棺、住居跡、経石聖納施設、埴輪、石枕、立花、玉類、土師器、須恵器、経石(旧西和田古墳群)	佐原市 №18	7
13	西坂遺跡	土師器	佐原市 №18	9

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文・弥生時代の遺構と遺物

1 縄文時代 (第19図1～4・図版15)

縄文時代の遺構については確認することはできなかった。また調査対象区全域が古墳時代～奈良時代頃に整地されている可能性があり、三戸式～田戸下層式と思われる縄文式土器が少量みられるのみである。

近隣遺跡として縄文時代早期の西ノ城貝塚などが知られるため、香取海に面した当遺跡においても台地内のいずれかに集落が形成されていた可能性があると考えられる。

2 弥生時代 (第19図5～11・図版15)

弥生時代の遺構・遺物についても縄文時代と同様にわずかに弥生土器を検出したにとどまるものである。おもに弥生時代後期と考えられるものである。しかしながら第19図5は櫛状のもので方形区画により施工されており、いわゆる十王台式であろうか。

第2節 古墳時代の遺構と遺物

今回調査された範囲内においては古墳時代が中心となる時代である。

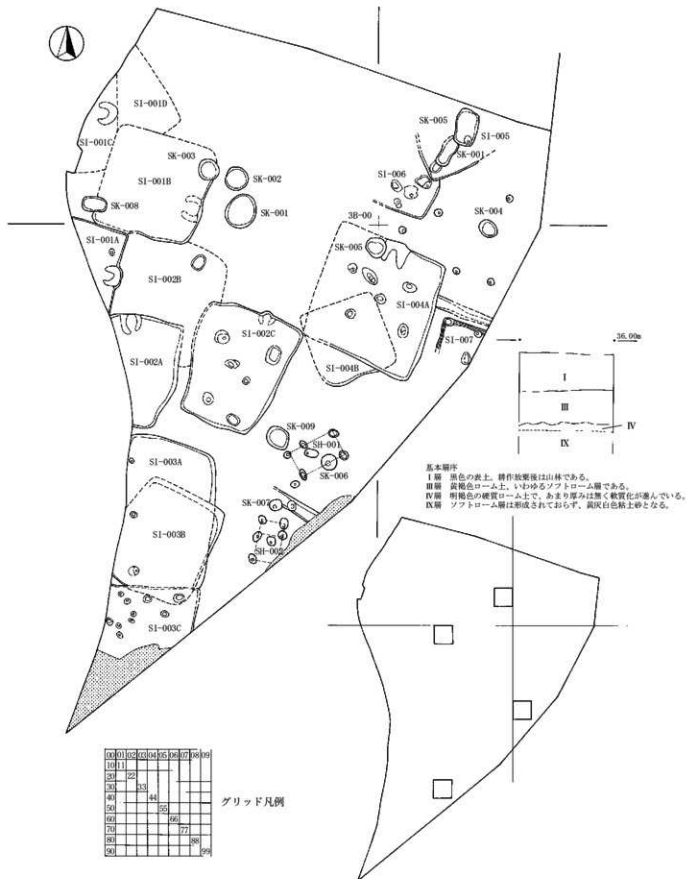
この狭い調査範囲内 (第3図) から竪穴住戸跡15軒 (第2表)、掘立柱建物跡2棟、土坑12基、溝1条が発見された。

出土遺物に関しては、土器類が主であり、杯類の比率が高いことと、東海以西からの搬入品と思われる特殊器台などが検出されるなど都府推定地に近接する遺跡らしい遺物もみ受けられた。

そのほかの遺物として石製紡錘車および石製機造品 (有孔円板) 4点の出土がみられた。なお、出土土器に関してはそれぞれ一覧表にとりまとめた。

第2表 住居一覧

遺構No	位置 (主グリッド)	平面形	カマド位置	主軸方向	規模 (m)	床面深さ (m)	主柱穴	壁周溝
SI-001A	3A-06	方形	南東壁中央	N-109° -E	(5.0) × 4.8	0.32	-	なし
SI-001B	2A-97	方形	南東壁南寄	N-107° -E	(5.49) × 5.55	0.29	-	なし
SI-001C	2A-86	方形	(東壁中央)	N-89° -E	(6.2) × (6.2)	-	-	なし
SI-001D	2A-86	方形	甕平?	N-56° -E	(6.0) × (6.0)	0.3	-	なし
SI-002A	3A-16	方形	北壁西寄	N-15° -E	5.88 × (5.68)	0.54	-	なし
SI-002B	3A-07	方形	甕平?	N-16° -E	(6.4) × (6.0)	-	-	なし
SI-002C	3A-18	縦長方形	北東壁東寄	N-21° -E	6.49 × 4.72	0.58	(4)3	なし
SI-003A	3A-37	縦長方形	-	N-9° -E	(7.0) × (6.0)	-	-	なし
SI-003B	3A-47	方形	-	N-31° -E	(6.1) × (5.2)	0.32	-	なし
SI-003C	3A-56	方形	-	N-4° -E	(5.0) × (5.0)	0.31	-	なし
SI-004A	3B-00	方形	北東壁中央	N-23° -E	6.49 × (6.4)	0.44	4	なし
SI-004B	3A-19	方形	甕平?	N-69° -E	(4.2) × (4.1)	-	-	なし
SI-005	2B-90	方形	-	N-68° -E	(5.0) × (5.0)	0.36	-	なし
SI-006	2B-90	方形	-	N-21° -E	(5.0) × (5.0)	0.24	-	なし
SI-007	3B-11	方形	-	N-17° -E	(6.0) × (6.0)	0.08	-	(全周)



第3図 遺構分布図及び下層確認調査状況図

1 竪穴住居跡

SI-001A・B・C・D号竪穴住居跡（第4～6・19図、第3表、図版3・4・11・16）

調査区最北端より検出されている。4軒の切り合いを持ち、明瞭な掘り込みの残るのはSI-001A号およびB号竪穴住居跡のみである。

A号竪穴住居跡は縦横とも約5mのほぼ正方形と推定される。遺構確認面からの掘り込みは27cm。カマドは東カマドである。カマドは竪穴住居跡廃棄時に破砕されたと考えられる。状況的には袖葺盤部分と火床部が残されるのみである。

床面はよく踏み硬められており、しっかりとした造りかと思われるが、柱穴・貯蔵穴の存在は確認されなかった。すべての竪穴住居跡において調査の最終段階で床面を掘り下げ柱穴などの確認を実施したものの、はっきりとしたものは検出されることはなかった。

遺物はカマド周辺からの出土が主となるが、全体の1/3程度の調査であり、大半が調査不能区域に残されたのは残念である。

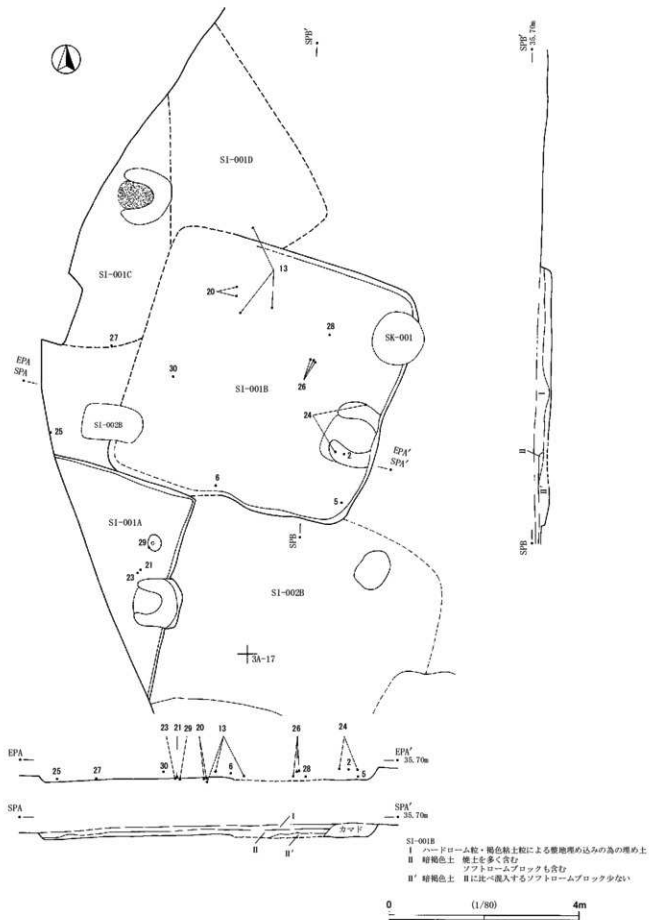
B号竪穴住居跡はA号竪穴住居跡の西側に重複して検出された。遺構確認段階でプランの1/2を確認できたものである。当竪穴住居跡もカマドは東壁に設置されている。カマドはかなり崩れた状態で廃棄されており、また床上3cm程度の白色粘土砂を敷き、その上にカマドを構築するというあまりみかけない形状で造られていた。

プランとしてはほぼ方形でA号竪穴住居跡と同じく縦横5m前後のものとなろうか。この付近は表土も薄く、削平を受けているためはっきりとした掘り込みも確認できていない。床面は踏み硬められており硬化面が確認できている。主要な遺物はカマド及びカマド脇からの出土のものが中心である。

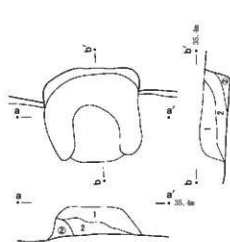
C号竪穴住居跡はわずかに残る掘り込みと床面と思われる硬化面の広がりから確認できた。遺物は明確に本竪穴住居跡に伴うといえるものはない。カマドと考えられる袖葺部及び火床部と想定される焼土の存在から東カマドのある竪穴住居跡として想定される。プラン的には推定一辺が4～5m程度の方形を示すと考えられる。

D号竪穴住居跡は遺構面清掃時にプランとしてとらえられた。ほんのわずかな掘り込みが残るのみであったが、はっきりとした床面の硬化部が一部残されており、ほかと同様に一辺5m程度の竪穴住居跡であったものと推測される。遺物については攪乱状況などから確実に当竪穴住居跡からの検出とはしえない。

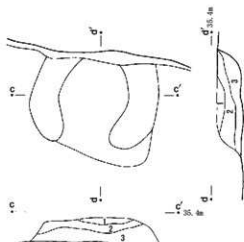
遺物は杯が多くみられ、ともに胎土は粗く金雲母・石英粒などを含む。杯類は丁寧なヘラ整形が目立つものの胎土の粗さから雑な感じが残るものが多い。瓶類に関しても同様で外面は粗いヘラ整形が目立つ。39は小型の手捏ね土器で、内面に指で押さえた痕跡が目立つ。いわゆる常陸産の土師器といわれるものであろうか。そのほかには土玉が1点出土している。石製品として滑石製の有孔円板（第21図16）が一点出土している。土器を含め古墳時代後期のものが大半である。



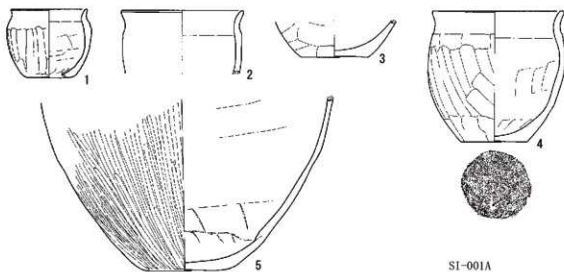
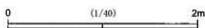
第4図 SI-001号竪穴住居跡実測図・遺物出土状況図



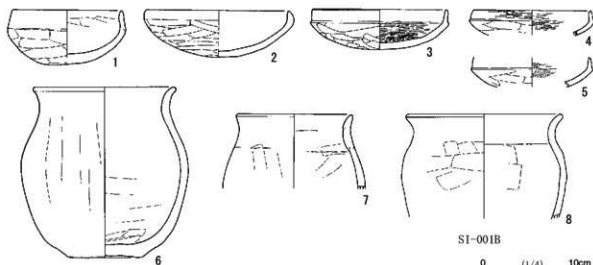
- SI-001A カマド
 1 好褐色土 カマド跡れ込み、灰白色粘土とハードロームブロックの混入土
 2 黒褐色土 積み強くソフトローム混入
 色に橙土・粘土粒混入
 ② 袖機穴 (開口) 奥に比一粘土量多く含む
 基部も明らかではない



- SI-001B カマド
 1 褐色土 粘土粒土混入、天井の残欠
 2 褐色土 粘土粒土混入、1より粘土混入少ない
 3 灰白色粘土 流石材、カマドは破砕されている



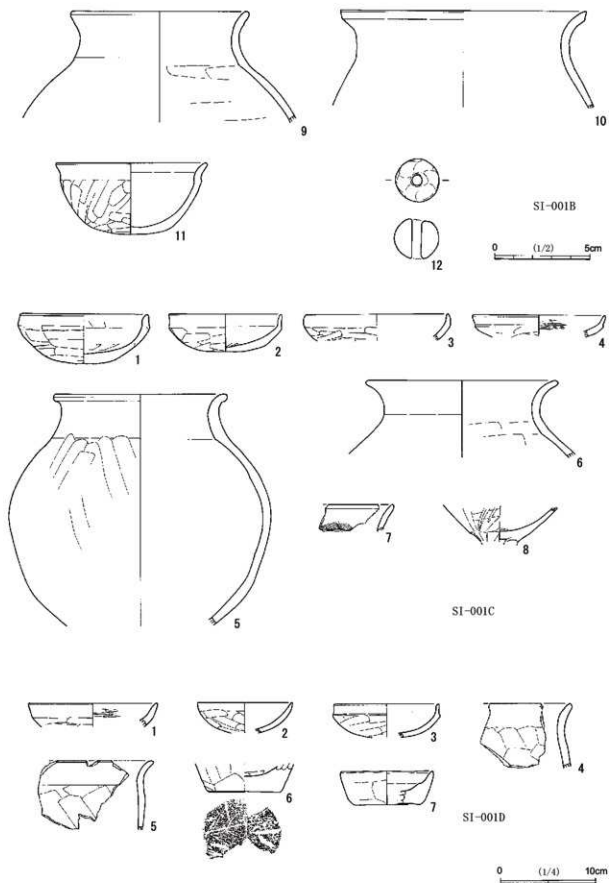
SI-001A



SI-001B



第5図 SI-001A・B号竪穴住居跡カマド実測図・出土遺物(1)



第6图 SI-001B·C·D号整穴住居跡出土遺物(2)

第3表 SI-001号竪穴住居跡出土遺物一覧

遺物№	種別No	器種	器形	遺存状況		口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	底面処理	彩色処理	備考
				%	CR									
SI-001A	1	土師器	小型壺	20	(8.0)	7.0	(4.8)	砂粒含む			5YR5/6 明赤褐色			口縁部だけ、体部外面へだけ、体部内面へだけ
SI-001A	2	土師器	小型壺	口縁部～胴部20	(12.8)	<6.7>	-	砂粒含む			5YR4/3 にぶい赤褐色			口縁部だけ、体部内面へだけ、器面剥落
SI-001A	3	土師器	壺	胴下半部～底部80	-	<3.9>	7.2				5YR6/6 褐色			外面へだけ、底部へだけ、器面剥落
SI-001A	4	土師器	小型壺	80	13.7	13.8	7.0				5YR6/6 褐色	木葉痕		口縁部だけ、体部外面へだけ、体部内面へだけ、底部へだけ
SI-001A	5	土師器	壺	胴部～底部70	-	<18.1>	9.0				10YR6/4 にぶい黄褐色			外面へだけ、内面へだけ
SI-001B	1	土師器	杯	80.0	11.4	5.7	丸底	砂粒、微量の雲母を含む			5YR4/2 灰褐色			口縁部だけ、外面へだけ（輪痕残る）、内面へだけ
SI-001B	2	土師器	杯	90	14.9	4.9	丸底				7.5YR5/4 にぶい褐色	内外面 黒色		口縁部だけ、外面へだけ、内面へだけ
SI-001B	3	土師器	杯	40	(14.0)	4.3	丸底				7.5YR4/3 褐色	内外面 黒色		口縁部だけ、外面へだけ、内面へだけ
SI-001B	4	土師器	杯	破片	(12.4)	<2.6>	丸底				10YR4/2 灰黄褐色			口縁部だけ、外面へだけ、内面へだけ
SI-001B	5	土師器	杯	破片	-	<3.1>	丸底				7.5YR6/6 褐色			口縁部だけ、外面へだけ、内面へだけ
SI-001B	6	土師器	小型壺	50	(14.7)	18.0	(8.0)	砂粒、微量の雲母を含む			2.5YR5/6 明赤褐色			口縁部だけ、体部外面へだけ、体部内面へだけ、器面剥落
SI-001B	7	土師器	小型壺	口縁部～胴部20	(12.0)	<7.8>	-	砂粒、微量の雲母を含む			5YR5/4 にぶい赤褐色			口縁部だけ、体部外面へだけ、体部内面へだけ、器面剥落
SI-001B	8	土師器	壺	口縁部～胴部10	(16.0)	<11.0>	-	砂粒含む			5YR5/5 明赤褐色			口縁部だけ、体部外面へだけ、体部内面へだけ、器面剥落
SI-001B	9	土師器	壺	口縁部～胴上半部25	(18.3)	<11.8>	-	石英粒、微量の雲母等を含む			10YR6/4 にぶい黄褐色			口縁部だけ、体部外面へだけ
SI-001B	10	土師器	壺	破片	(25.8)	<10.2>	-	砂粒、微量の雲母等を含む			7.5YR6/4 にぶい褐色			器面剥落
SI-001B	11	土師器	鉢	80	15.8	7.5	丸底	砂粒含む			7.5YR6/6 褐色			口縁部だけ、外面へだけ、内面へだけ
SI-001B	12	土製品	土玉	100	径2.3	孔径0.5	厚2.1				7.5YR6/6 褐色			
SI-001C	1	土師器	杯	70	13.2	5.2	丸底	砂粒含む			5YR5/6 明赤褐色			口縁部だけ、外面へだけ（輪痕残る）、内面へだけ
SI-001C	2	土師器	杯	20	(13.8)	4.0	丸底	砂粒含む			7.5YR4/2 灰褐色			口縁部だけ、外面へだけ、内面へだけ
SI-001C	3	土師器	杯	20	(15.0)	<2.8>	丸底				7.5YR1.7/1 黒	内外面 黒色		口縁部だけ、外面へだけ、内面へだけ
SI-001C	4	土師器	杯	破片	(14.0)	<2.25>	丸底				7.5YR5/3 にぶい褐色			口縁部だけ、外面へだけ、内面へだけ
SI-001C	5	土師器	壺	30	(20.0)	<24.4>	-	砂粒含む			5YR6/6 褐色			口縁部だけ、体部外面へだけ、器面剥落
SI-001C	6	土師器	壺	口縁部～胴上半部20	(17.8)	<8.1>	-	砂粒、微量の雲母を含む			5YR5/8 明赤褐色			口縁部だけ、器面剥落
SI-001C	7	土師器	壺	破片	-	-	-				7.5YR6/6 褐色			胴部へ
SI-001C	8	土師器	高杯	杯部50	-	<3.8>	-				7.5YR6/6 褐色			杯部外面へだけ、器面剥落、器面剥落
SI-001D	1	土師器	杯	破片	(15.4)	<2.5>	-	砂粒、微量の雲母を含む			5YR5/6 明赤褐色			口縁部だけ、外面へだけ、内面へだけ
SI-001D	2	土師器	杯	25	(10.0)	<3.2>	丸底				5YR7/6 褐色			口縁部だけ、外面へだけ、内面へだけ
SI-001D	3	土師器	杯	25	(11.0)	<3.5>	丸底	砂粒含む			7.5YR7/6 褐色	内外面 黒色		口縁部だけ、外面へだけ、内面へだけ
SI-001D	4	土師器	壺	破片	-	-	-	石英粒、微量の雲母を含む			7.5YR6/6 褐色			
SI-001D	5	土師器	壺	破片	-	-	-	砂粒、雲母等多く含む			5YR4/6 赤褐色			
SI-001D	6	土師器	壺	底部70	-	<3.0>	7.7	砂粒多く含む			5YR4/4 にぶい赤褐色	木葉痕		外面へだけ、内面へだけ
SI-001D	7	土師器	手捏土器	20	(9.6)	3.5	(7.0)	砂粒含む			5YR4/6 赤褐色			

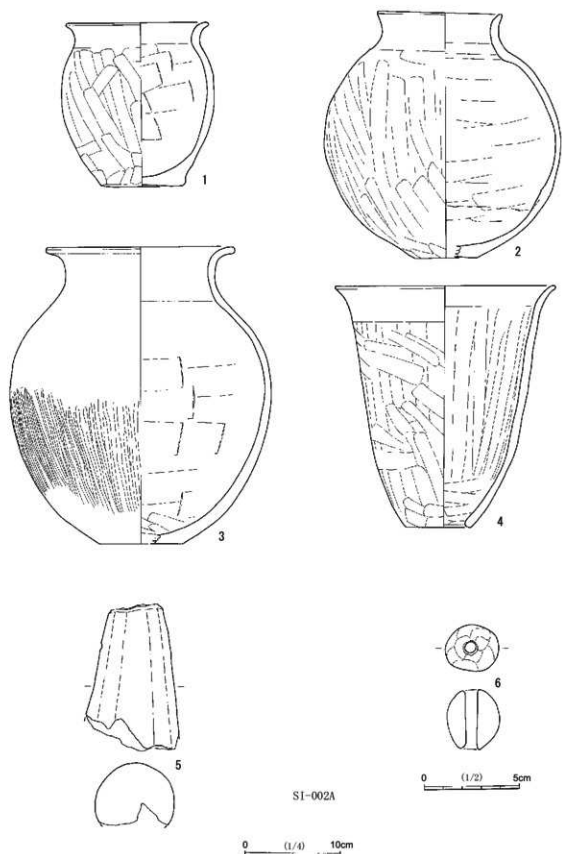
SI-002A・B・C号竪穴住居跡（第7～11図、第4表、図版4・5・6・11～13・16）

3軒の重複がみられる。覆土中にロームブロックを含むものであり、埋め戻された可能性が高いと思われる。A号竪穴住居跡は全体の3/5程度の調査である。カマドは主軸方向、概ね北壁に造られ、竪穴住居跡自体は一辺6m程度、床面は硬化面もしっかりと残っていた。柱穴は床面を一部剥いてみたものの確認できなかった。カマドは遺存状態がよく、カマドで使用されていたであろう土器一式（瓶・甌・支脚）が検出されている。（第8図1～5）出土遺物はカマドからのものがほとんどであり、ほかに流れ込みと考えられる細片がある。このうち、当竪穴住居跡に伴う遺物としては、床上からの土玉が1点あげられる。

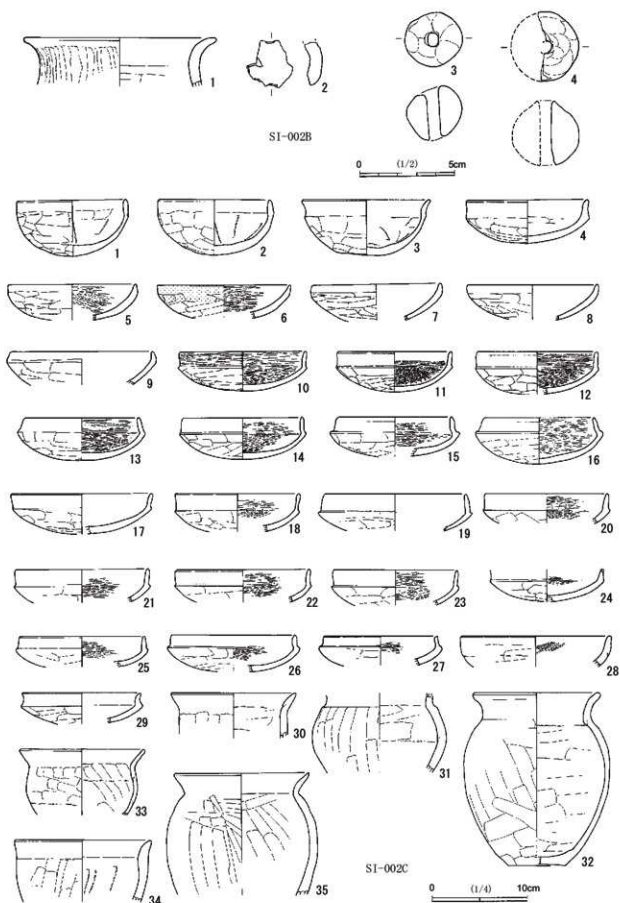
B号竪穴住居跡は重複及び攪乱と抜根により切り合いを明確にとらえられなかった。西側をA号竪穴住居跡に切られ、東側はC号竪穴住居跡に、南側をA号竪穴住居跡に切られるなど残された部位でわずかに床面かと思われる硬化面が見受けられたため位置を想定した。おおむね一辺6mの方形であろうかと推定する。遺物もほとんど残されず、床面密着で検出された小型瓶と土玉2点および鉄屑の検出であった。

C号竪穴住居跡は主軸長が6.5m、横軸が4.5mの不整形長方形である。確認面からの掘り込みは48cmである。柱穴は4本柱と推定できるがこれも不整形ないしは正規の位置での検出ができなかった可能性もあると同時に、プランの不整形さからもう一軒、やや小規模な竪穴住居跡が同一床面で存在した可能性を指摘しておく。竪穴住居跡断面においては攪乱により明確にみることができず、こちらもロームブロック混入土による埋め込みと考えられるため、近似覆土での掘り込みとなるためプランなどからも確認できなかった。また主軸方向北壁にカマドが検出されたが完全に撤去したであろう状態での検出である。煙道部に伴う掘り込みの張り出しが確認され火床部焼土およびカマド袖基部と思われる白色粘土がわずかにみられたため存在がわかったものである。

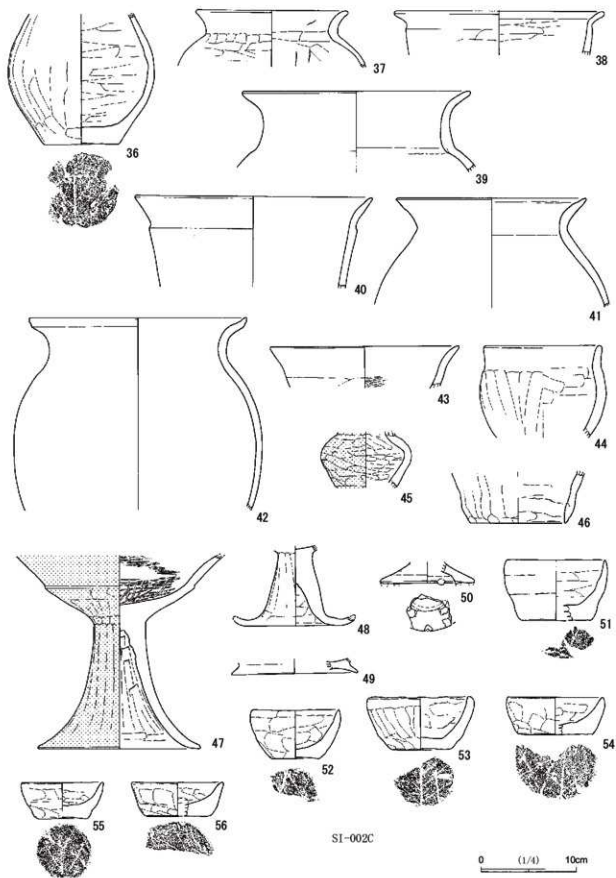
遺物は大半が竪穴住居跡廃棄時以降に投棄された可能性がある。一群は（図版6-2・4）にみられるように北東コーナーから流れ込むように検出されている。壁際にまとめて積み残された杯の一群は当竪穴住居跡廃棄時のものと考えられるかも知れない。器種としては大量の杯と瓶類のほか小型の手握ね土器が6点出土している。しかしながら、ともに古墳時代後期と考えられ、大きな時期差は見受けられない。



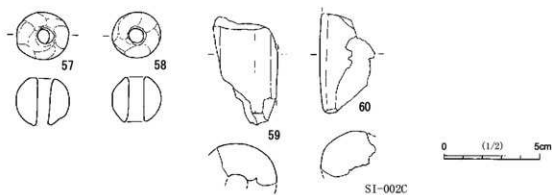
第8圖 SI-002A号竪穴住居跡出土遺物(1)



第9图 SI-002B·C号竖穴住居跡出土遺物(2)



第10图 SI-002C号竖穴住居跡出土遺物(3)



第11图 SI-002C号竖穴住居跡出土遺物(4)

第4表 SI-002号竪穴住居跡出土遺物一覧(1)

遺構No.	押込 No.	器種	器形	遺存度	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	底部処理	彩色処理	備考
				%	cm	cm	cm						
SI-002A	1	土師器	小型壺	50	15.1	17.3	8.6	石英粒多く含む粗い胎土		5YR5/6 橙			口縁部が、体外面へ向け、体内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002A	2	土師器	壺	50	13.0	25.9	6.6			5YR5/6 橙			口縁部が、体外面へ向け、体内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002A	3	土師器	壺	25	(19.6)	31.4	(9.0)	石英粒、微量の面母等を含む		10YR5/4 にぶい黄橙			口縁部が、体外面へ向け、体内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002A	4	土師器	瓶	90	23.2	25.5	6.9		良好	5YR5/6 橙			口縁部が、体外面へ向け、体内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002A	5	土製品	支脚		長15.0	幅9.8	厚6.6						
SI-002A	6	土製品	土玉		長径2.9	孔径0.6	厚3.1			7.5YR5/4 にぶい橙			
SI-002B	1	土師器	覆口鉢	口縁部～ 胴上半部迄	(20.0)	<5.2>	-		やや不良	7.5YR5/4 にぶい橙			口縁部が、体外面へ向け、体内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002B	2	土製品	羽口		長5.0	幅4.8	厚1.8			10YR5/2 灰黄緑			遺構外
SI-002B	3	土製品	土玉		長径3.0	孔径0.6	厚2.9			5YR5/6 明赤褐			
SI-002B	4	土製品	土玉		長径3.7	孔径0.6	厚3.4			7.5YR5/6 橙			
SI-002C	1	土師器	杯	75	11.4	5.9	丸底		やや不良	5YR5/6 橙			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	2	土師器	杯	100	11.5	5.9	丸底		やや不良	5YR5/6 橙			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	3	土師器	杯	90	13.4	5.9	丸底		やや不良	5YR5/6 橙			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	4	土師器	杯	100	12.8	4.5	丸底	砂粒含む	やや不良	5YR5/6 橙			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	5	土師器	杯	30	(13.4)	<3.8>	丸底			7.5YR7/4 にぶい橙			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	6	土師器	杯	20	(14.0)	<3.5>	丸底			7.5YR7/4 にぶい橙		外面赤彩	口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	7	土師器	杯	40	(13.4)	<3.8>	丸底			7.5YR5/3 にぶい褐		内外面 黒色	口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	8	土師器	杯	破片	(13.7)	<3.7>	丸底			7.5YR5/3 にぶい褐		内面黒色	口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	9	土師器	杯	30	(15.0)	<3.5>	丸底			7.5YR5/6 にぶい橙			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	10	土師器	杯	100	13.4	4.2	丸底			7.5YR7/4 にぶい橙			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	11	土師器	杯	100	12.0	4.2	丸底			10YR7/4 にぶい黄橙		内外面 黒色	口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	12	土師器	杯	45	(12.2)	<4.5>	丸底			7.5YR7/4 にぶい橙		内外面 黒色	口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	13	土師器	杯	60	12.0	4.5	丸底			7.5YR7/4 にぶい橙			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	14	土師器	杯	30	(12.6)	4.4	丸底			7.5YR7/4 にぶい橙			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	15	土師器	杯	25	(12.0)	<4.1>	丸底			7.5YR7/4 にぶい橙			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	16	土師器	杯	50	11.5	4.9	丸底			7.5YR7/4 にぶい橙			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	17	土師器	杯	40	(15.0)	<4.2>	丸底			7.5YR7/4 にぶい橙			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	18	土師器	杯	20	(13.2)	<4.0>	丸底			7.5YR7/4 にぶい橙			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	19	土師器	杯	破片	(15.0)	<3.9>	丸底			7.5YR7/4 にぶい橙			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	20	土師器	杯	25	(13.0)	<3.1>	丸底			7.5YR7/4 にぶい橙			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	21	土師器	杯	破片	(14.0)	<3.5>	丸底			7.5YR5/3 にぶい褐			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	22	土師器	杯	破片	(14.0)	<3.4>	丸底			7.5YR5/3 にぶい褐			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	23	土師器	杯	破片	(13.0)	<3.7>	丸底			7.5YR5/3 にぶい褐			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている
SI-002C	24	土師器	杯	破片	-	<3.4>	丸底			7.5YR5/3 にぶい褐			口縁部が、外面へ向け、内面へ向け、二次焼成。内面に有機物付着。よく煮吹きしている

SI-002号竪穴住居跡出土遺物一覧(2)

SI-002C	25	土師器	杯	破片	13.1	<3.2>	丸底			10YR6/4 にぶい黄褐色		口縁部37.7、外面9.7x9.7、 断面割落、内面は？
SI-002C	26	土師器	杯	破片	(13.0)	<3.8>	丸底			7.5YR6/4 にぶい橙		口縁部37.7、外面9.7x9.7、内 面は？
SI-002C	27	土師器	杯	破片	(12.0)	<3.1>	丸底			5YR6/6 橙		口縁部37.7、外面9.7x9.7、内 面は？
SI-002C	28	土師器	杯	破片	(15.5)	<3.2>	-	砂粒含む		5YR5/4 赤褐色		内面は？
SI-002C	29	土師器	杯	65	12.4	<3.3>	丸底	砂粒、微量の 雲母含む		2.5YR5/6 明赤褐色		口縁部37.7、外面9.7x9.7、内 面は？
SI-002C	30	土師器	小型壺	口縁部～ 胴上半部 20	(13.1)	<4.7>	-	石英・金雲母等 混入し、縄文土 器層		2.5YR5/8 明赤褐色		口縁部37.7、体部外面9.7x9.7、 断面割落、体部内面9.7x9.7
SI-002C	31	土師器	小型壺	胴部～ 頸部 20	-	<8.4>	-	砂粒、雲母等多 く含む		2.5YR4/4 にぶい赤褐色		頸部37.7、体部外面9.7x9.7、 肩縁は？状工具による作り 出し、体部内面9.7x9.7
SI-002C	32	土師器	小型壺	30	(13.0)	18.3	(6.0)			5YR6/6 橙		口縁部37.7、体部外面9.7x9.7、 体部内面9.7x9.7
SI-002C	33	土師器	小型壺	口縁部～ 胴下半部 20	(13.0)	<7.0>	-	石英粒等混入 多い		10YR5/4 にぶい黄褐色		口縁部37.7、体部外面9.7x9.7、 体部内面9.7x9.7
SI-002C	34	土師器	鉢	破片	(14.4)	<6.6>	-	あまり精製さ れた胎土では なく作りも雑		5YR5/6 明赤褐色		口縁部37.7、外面9.7x9.7、内 面は？
SI-002C	35	土師器	小型壺	口縁部～ 胴下半部 20	(14.0)	<12.9>	-	砂粒、微量の 雲母含む		5YR6/6 橙		口縁部37.7、体部外面9.7x9.7、 体部内面9.7x9.7
SI-002C	36	土師器	小型壺	胴部～ 底部 25	-	<13.8>	7.8	胎土混入物多 い		5YR4/8 赤褐色	木炭痕	断面広い、仕上がり雑
SI-002C	37	土師器	壺	口縁部～ 胴上半部 30	(16.0)	<5.9>	-			5YR5/6 明赤褐色		口縁部37.7、体部外面9.7x9.7、 体部内面9.7x9.7
SI-002C	38	土師器	壺	破片	(22.0)	<4.6>	-	小砂粒を多く 混入		5YR5/6 明赤褐色		口縁部37.7、体部内外面9.7x9.7
SI-002C	39	土師器	壺	破片	(23.8)	<8.6>	-	石英粒等含む		10YR7/3 にぶい黄褐色		口縁部37.7、体部外面9.7、 体部内面9.7x9.7
SI-002C	40	土師器	壺	破片	(24.8)	<9.6>	-			7.5YR2/1 黒	外面黒色	口縁部37.7、断面割落、内面 に有機物付着
SI-002C	41	土師器	壺	20	(20.0)	<11.5>	-	石英粒、雲母等 含む		10YR6/4 にぶい黄褐色		二次焼成、内面肩部に3片付着
SI-002C	42	土師器	壺	口縁部 30	(22.8)	<20.3>	-	石英粒、雲母等 含む		10YR7/4 にぶい黄褐色		体部内外面9.7、断面割落
SI-002C	43	土師器	鉢	破片	(19.8)	<4.4>	-			5YR5/6 明赤褐色		口縁部37.7、外面9.7x9.7、内 面は？
SI-002C	44	土師器	鉢	口縁部～ 胴部 35	(12.0)	<9.8>	-	砂粒、微量の 雲母含む		5YR4/8 赤褐色		口縁部37.7、体部外面9.7x9.7、 体部内面9.7x9.7
SI-002C	45	土師器	壺	胴部～25	-	<6.0>	-			5YR6/6 橙	外面赤彩	胴部外面9.7x9.7、胴部内面9.7x9.7
SI-002C	46	土師器	甌底部	胴下半部 ～底部 30	-	<5.4>	(10.0)	石英粒等多く 含む		5YR4/8 赤褐色		外面9.7x9.7、内面9.7x9.7
SI-002C	47	土師器	西杯	杯部～ 底部 30	-	<20.4>	(17.2)			7.5YR6/6 橙	外面赤彩 内面黒色	杯部外面9.7、9.7x9.7、内面 は？、底部内外面9.7x9.7、9.7
SI-002C	48	土師器	西杯	胴部 70	-	<8.5>	-			2.5YR4/6 赤褐色		外面9.7x9.7、9.7、内面9.7x9.7
SI-002C	49	土師器	西台付?	破片	-	<1.5>	(13.3)			5YR6/6 橙		
SI-002C	50	土師器	西杯	破片	(10.0)	<2.3>	-			7.5YR6/6 橙		
SI-002C	51	土師器	手捏土器	20	(10.4)	6.4	(7.5)	焼成も甘く石 英等混入多い		2.5YR4/6 赤褐色	木炭痕	体部外面輪横板、体部内面9.7
SI-002C	52	土師器	手捏土器	30	(9.1)	5.1	(5.0)	小砂粒多く含 む、縄文土器様 の胎土		5YR4/6 赤褐色	木炭痕	
SI-002C	53	土師器	手捏土器	35	(11.3)	5.6	(6.0)	小砂粒多く含 む、縄文土器様 の胎土		5YR4/8 赤褐色	木炭痕	
SI-002C	54	土師器	手捏土器	50	10.1	4.0	8.0	広い胎土で二 次焼成あり		5YR4/8 赤褐色	木炭痕	内面に有機物付着痕みられる
SI-002C	55	土師器	手捏土器	60	8.6	4.8	5.2	小砂粒多く含 む、縄文土器様 の胎土		5YR4/8 赤褐色	木炭痕	内面はよく磨かれている
SI-002C	56	土師器	手捏土器	40	(9.6)	3.5	(7.0)	砂粒多く含む		5YR4/8 赤褐色	木炭痕	一見すると底部の再利用かと思 われるが完品
SI-002C	57	土製品	土玉	-	長径2.8	孔径0.7	厚2.5			7.5YR6/6 橙		
SI-002C	58	土製品	土玉	-	長径2.6	孔径0.8	厚2.3			2.5YR4/8 赤褐色		
SI-002C	59	土製品	羽口	-	長5.7	幅3.4	厚2.2			7.5YR6/4 にぶい橙		
SI-002C	60	土製品	羽口	-	長5.2	幅2.9	厚2.4			7.5YR5/3 にぶい褐		

SI-003A・B・C号竪穴住居跡（第12・13図、第5表、図版7・14・16）

調査区の最も南に位置し、攪乱および雑木の根による影響が著しかった。竪穴住居跡と想定される掘り込みは3軒である。

このブロックの竪穴住居跡群もロームブロックを主とする土で埋められており、どの時期においても同様の土での埋め込みと、雑木の根の入り込みによりセクションをまともに残すことができず、明瞭に切り合いの関係をみることができなかった。

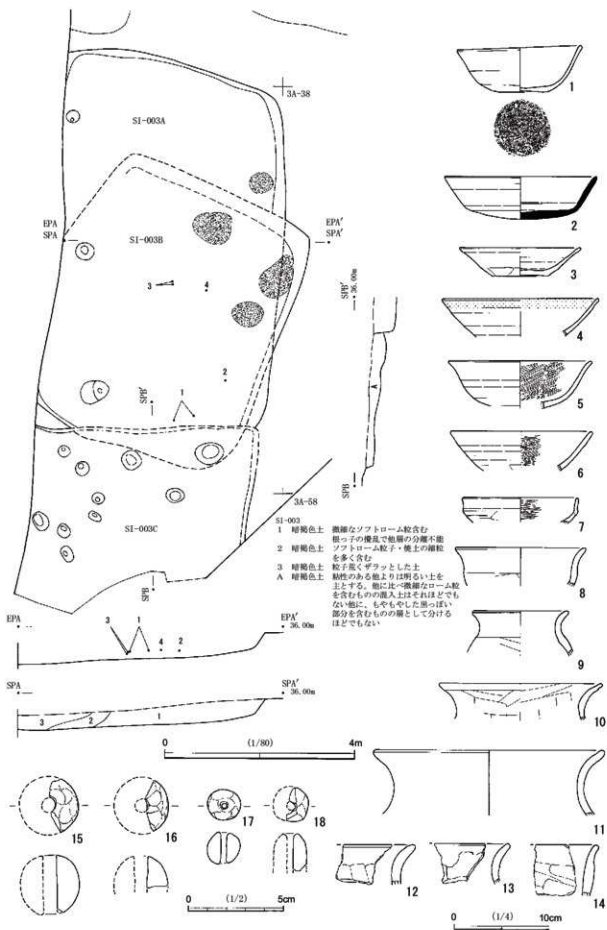
A号竪穴住居跡は全体の1/5程度の遺存であり一辺は5mの方形と推定する。床面までは遺構確認面より53cmをはかる。床面は根による攪乱で明瞭な硬化面などの検出はなされていない。

B号竪穴住居跡は一辺5mの方形と推定される。確認面から床面までは59cm、柱穴は検出されていない。

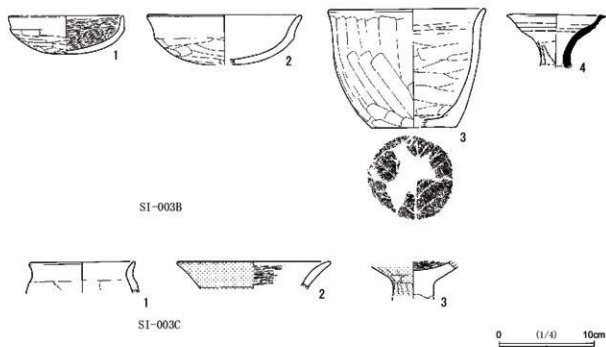
C号竪穴住居跡は調査区最南端に位置し大半をB号竪穴住居跡に切り取られており床面とわずかな立ち上がりを確認した。最南端部分は土取り時のオーバーハング部分にかかるため調査を断念した。遺構確認面からの掘り込みは42cmと浅い。壁と床面の一部のみの検出でありそのプランは推定するに至らないが、おおむね一辺5m程度の方形の竪穴住居跡と考えられる。C号竪穴住居跡部分からは柱穴状のものが複数本検出されているが、本竪穴住居跡に伴う柱穴とは確定できない。

遺物は古墳時代後期のものが主となるが、B号竪穴住居跡は須恵器の杯がみられる。奈良時代のものであろうか、茨城系の須恵器と思われる。同じく碗がみられる。

この調査区は攪乱もひどかったため、遺物的にはかなり混在しているのでB号竪穴住居跡以外は基本的に古墳時代後期と考えられる。4の竈についてはかなり良好な須恵器であり、その産地は東海系ではないだろうか。このB号竪穴住居跡が今回の調査区のなかにおいては一番新しい時期になる可能性が高い。



第12図 SI-003A号竪穴住居跡実測図及び遺物出土状況・出土遺物(1)



第13图 SI-003B・C号竖穴住居跡出土遺物(2)

第5表 SI-003号竪穴住居跡出土遺物一覧

遺物No.	押図No.	器種	器形	遺存度		口径 cm	胴径 cm	底径 cm	胎土	焼成	色調	底部処理	彩色処理	備考
				%	破									
SI-003A	1	土師器	杯	90	13.1	4.7	6.0			5YR5/6 明赤褐色	回転糸切		外面のびびり、内面びびり	
SI-003A	2	須恵器	杯	70	16.0	4.5	11.4	金雲母、石英粒含む	やや不良	10YR7/2 にぶい黄褐色			内外面のびびり、外面のびびり	
SI-003A	3	土師器	杯	25	(12.8)	3.0	(6.0)	金雲母、石英粒含む		7.5YR7/6 褐色			内外面のびびり、底部手持ちへびびり	
SI-003A	4	土師器	杯	口部～体部20	(16.4)	<4.0>	-			7.5YR7/4 にぶい褐色		一部赤彩か	外面のびびり、内面びびり、仕上げ良品	
SI-003A	5	土師器	高台付杯	破片	(15.0)	<5.0>	-			7.5YR6/6 褐色			外面のびびり、内面びびり	
SI-003A	6	土師器	杯	破片	(14.8)	<4.1>	-			7.5YR6/6 褐色			外面のびびり、へびびり、内面びびり	
SI-003A	7	土師器	杯	破片	(12.1)	<2.65>	丸底			7.5YR5/3 にぶい褐色			外面のびびり、へびびり、内面びびり	
SI-003A	8	土師器	鉢	破片	(13.6)	<4.0>	-	石英粒・雲母含む、胎土粗い		5YR5/6 明赤褐色			二次焼成、器面荒れている	
SI-003A	9	野生土器			(9.9)	<4.65>	-			5YR6/4 にぶい褐色			口縁部のびびり、体部外面のびびり、体部内面びびり	
SI-003A	10	土師器	壺	口縁20	(17.1)	<3.8>	-			7.5YR7/8 黄褐色			口縁部のびびり、体部外面のびびり、体部内面びびり	
SI-003A	11	土師器	壺	破片	(24.0)	<6.9>	-	石英粒・雲母含む、胎土粗い		7.5YR6/6 褐色			仕上げは丁寧	
SI-003A	12	土師器	壺	破片	-	-	-	石英粒・雲母含む、胎土粗い		7.5YR6/6 褐色				
SI-003A	13	土師器	壺	破片	-	-	-	石英粒・雲母含む、胎土粗い		5YR5/6 明赤褐色				
SI-003A	14	土師器	壺	破片	-	-	-	石英粒・雲母含む、胎土粗い		5YR1.7/1 黒				
SI-003A	15	土製品	土玉		径(3.1)	孔径(0.7)	厚<3.0>			7.5YR6/6 褐色				
SI-003A	16	土製品	土玉		径(2.9)	孔径(0.7)	厚<1.7>			5YR5/6 明赤褐色				
SI-003A	17	土製品	土玉		径1.8	孔径0.3	厚1.65			7.5YR6/6 褐色				
SI-003A	18	土製品	土罐		径(1.8)	孔径(0.3)	厚<2.0>			5YR6/6 褐色				
SI-003B	1	土師器	杯	90	12.0	4.0	丸底			10YR6/4 にぶい黄褐色			口縁部のびびり、外面のびびり、内面びびり	
SI-003B	2	土師器	杯	20	(16.2)	<5.25>	丸底	砂粒、微量の雲母含む		5YR5/6 明赤褐色			口縁部のびびり、外面のびびり、内面びびり	
SI-003B	3	土師器	小型壺	40	(16.4)	12.5	9.0	砂粒含む		7.5YR4/4 褐色	木炭痕		体部外面のびびり、体部内面のびびり	
SI-003B	4	須恵器	壺	口縁部～頸部100	10.5	<5.6>	-			7.5Y6/1 灰			内面自然釉付着	
SI-003C	1	土師器	小型壺	破片	(11.0)	<3.3>	-			2.5YR6/6 褐色			口縁部のびびり、体部外面のびびり、体部内面のびびり	
SI-003C	2	土師器		破片	(16.0)	<2.9>	-			7.5YR4/3 褐色			外面赤彩、内面黒色	外面のびびり、内面びびり
SI-003C	3	土師器	高杯		-	<3.9>	-			5YR6/6 褐色			外面赤彩、内面黒色	外面のびびり、内面びびり

SI-004A・B号竪穴住居跡（第14図、第6表、図版8・14）

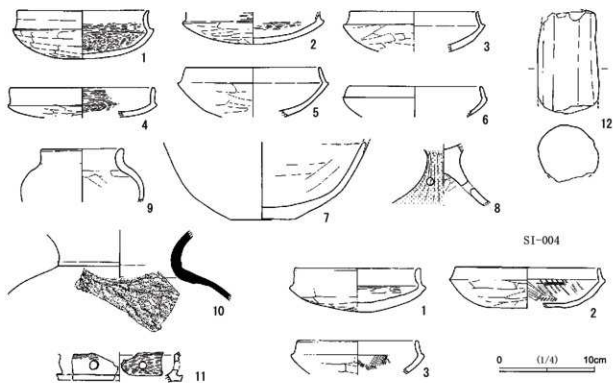
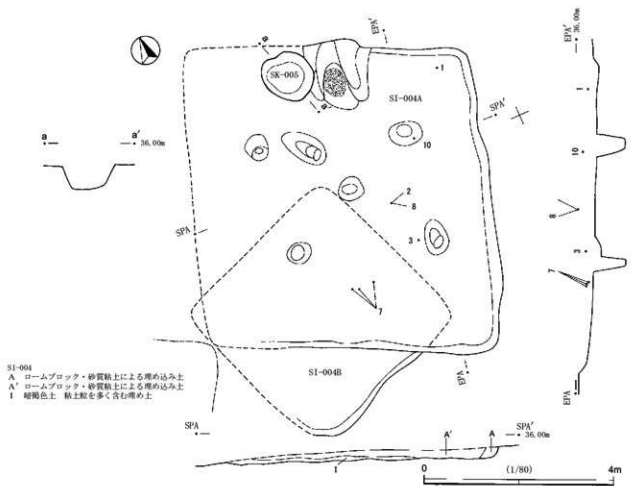
今回調査範囲で一番の平坦部に存在する。ほぼ方形を示し、一边は6.5mとSI-002C号竪穴住居跡とならぶ大きさとなる。主軸は北東方向でありカマドは北東壁に造られ、残されるカマドの状態からみてかなりしっかりとした造りであるが、破砕されているため袖基部および火床面の検出のみである。遺構としての残りは良好とはいえない。

A号竪穴住居跡の南西壁側にはB号竪穴住居跡が重複して存在する。床面のレベルもほぼ同一に近い。竪穴住居跡廃棄後人為的に埋め戻されているものと思われ、当初A号竪穴住居跡のプランのみが確認されていたが、南側壁面に違和感があり拡張した結果プランが判明した。一边が4mのほぼ方形、床面が同一レベルと先に記したが微妙にB号の方が深い。カマドおよび炉跡の痕跡は検出できなかった。杯が6点、瓶が2点、支脚1点が当竪穴住居跡の時期の遺物と思われる。古墳時代後期のものである。10の須恵器瓶は当遺跡内においてもかなり新しい時期のものか。

注目されるのは第14図11の特殊器台である。小破片での出土ではあるが、胎土もかなり緻密で焼成も良好である。时期的には古墳時代前期に近いものであろうか。地元産あるいは周辺からのものではなく東海系あるいはそれよりも西から搬入された可能性があると指摘しておく。なお一括遺物に含まれる第19図11（図版15）であるが、口縁の特徴などから、これもこの特殊器台と同じく東海より西からの搬入品の可能性のあるものである。

第6表 SI-004号竪穴住居跡出土遺物一覧

遺構No.	採回No.	器種	器形	遺存度	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	底部処理	彩色処理	備考
				%	CR	CR	CR						
SI-004A	1	土師器	杯	70	13.8	5.1	丸底	砂粒含む		5YR4/4 にぶい赤褐色			口縁部がわず、外面へがズリ、内面びき
SI-004A	2	土師器	杯	体部～底部30	-	<3.4>	丸底			5YR5/6 橙			外面びき、へがズリ、内面びき
SI-004A	3	土師器	杯	20	(13.5)	<4.25>	丸底			7.5YR5/4 にぶい橙			口縁部がわず、外面へがズリ、内面びき
SI-004A	4	土師器	杯	破片	(15.1)	<3.2>	丸底			7.5YR5/4 にぶい橙			口縁部がわず、外面へがズリ、内面びき
SI-004A	5	土師器	杯	破片	(14.0)	<3.2>	丸底			7.5YR5/6 にぶい橙			口縁部がわず、外面器面剥落、内面びき
SI-004A	6	土師器	杯	破片	(14.1)	<5.2>	丸底			7.5YR5/6 にぶい橙			口縁部がわず、外面へがズリ、内面びき
SI-004A	7	土師器	壺	胴下半部～底部40	-	<8.2>	6.8	石灰粒等多く含む		7.5YR5/4 にぶい橙			器面剥落、内面へがズリ
SI-004A	8	土師器	高杯	破片	-	<6.6>	-			7.5YR5/6 橙			外面赤彩 外面びき、内面へがズリ、乳3ヶ所
SI-004A	9	土師器	壺	口縁部～胴部30	(8.4)	<5.6>	-	砂粒、微量の雲母含む		2.5YR4/6 赤褐色			口縁部がわず、器面剥落、体部内面へがズリ
SI-004A	10	須恵器	壺	胴部～胴上半部20	-	<7.3>	-			5YR5/1 灰			胴部へがズリ、7ヶ具底
SI-004A	11	土師器	器台	破片	-	<3.1>	-	緻密		5YR5/6 明赤褐色			内面へが調整
SI-004A	12	土製品	支脚	長11.0	幅6.5	厚6.0							



第14図 S1-004A・B号竪穴住居跡実測図及び出土遺物 (S1-004・SK-005)

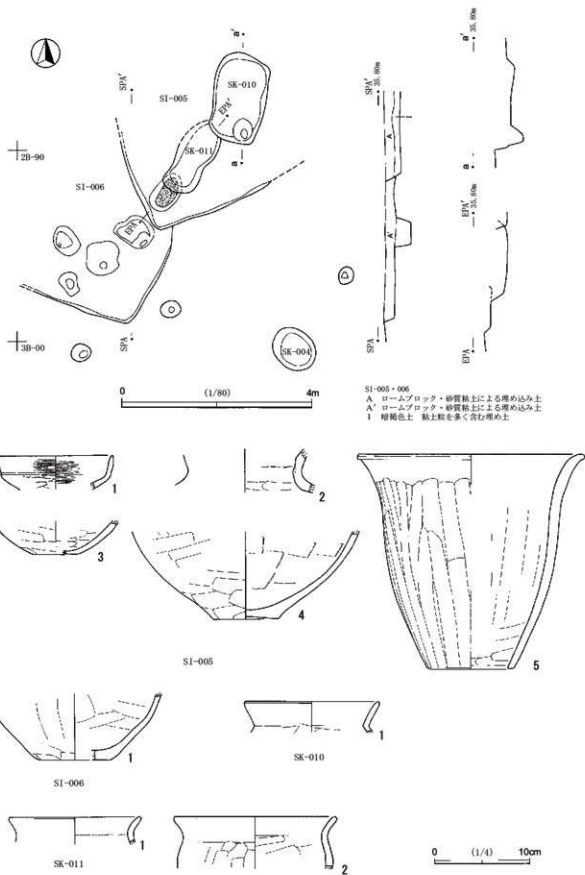
S1-005・006号竪穴住居跡（第15図、第7表、図版9・14・16）

調査区の最北端からの検出である。現状でかなりの急斜面部と思われた地点であるが、斜面の崩落または古い時期における地形の整形により、ともにその大半が流出している状況であった。プランは方形、コーナーの一辺のみである。S1-005号竪穴住居跡は軸方向をS1-004B号竪穴住居跡などとほぼ同等の方向を示している可能性がある。S1-006号竪穴住居跡についてはほかの大型の竪穴住居跡群と軸を同じくしている。

遺物はわずかな量であるがともに古墳時代後期のものである。明確な時期差はみられない。

第7表 S1-005・006号竪穴住居跡出土遺物一覧

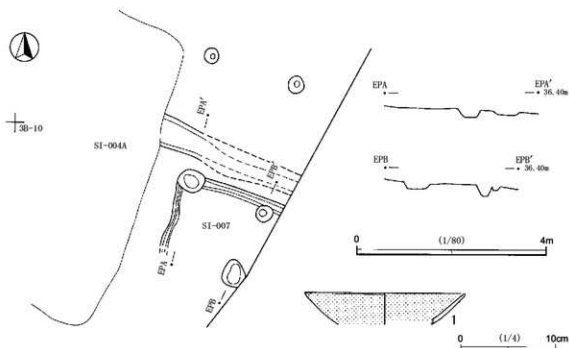
遺構No.	押込No.	器種	器形	遺存度	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	底部処理	彩色処理	備考
				%	cm	cm	cm						
S1-005	1	土師器	杯	破片	(12.0)	<3.6>	丸底			7.5YR4/1 褐灰		内外面 黒色	口縁部はぎ、外面はぎ、内 面はぎ
S1-005	2	土師器	甕	破片	-	<4.6>	-			2.5YR5/6 明赤褐			断面剥落、内面はぎ
S1-005	3	土師器	甕	剩下半部 ～底部30	-	<3.5>	(4.6)	石英粒、炭母等 含む		10YR3/3 暗褐			外面はぎ、内面はぎ
S1-005	4	土師器	甕	剩下半部 ～底部20	-	<9.2>	(6.8)	砂粒含む		7.5YR5/6 明赤褐			外面はぎ、内面はぎ
S1-005	5	土師器	甕	50	(23.6)	22.6	9.1	砂粒含む		2.5YR5/6 明赤褐			口縁部はぎ、外面はぎ、内 面はぎ
S1-006	1	土師器	甕	破片	-	<7.0>	(7.6)	石英、炭粒の炭 母含む		5YR5/4 によい赤褐			



第15図 SI-005・006号竪穴住居跡実測図及び出土遺物 (SI-005・006・SK-010・011)

SI-007竪穴住居跡（第16図、第8表、図版8）

調査区の最東端コーナーの一辺のみであり、概ね全体の1/3の検出であろうか。掘り込みはなく周溝部のみの検出である。P1は当竪穴住居跡に伴うものであろうか。遺物は1点のみ出土するもの確実に当竪穴住居跡に伴うかは不明である。



第16図 SI-007号竪穴住居跡実測図及び出土遺物

第8表 SI-007号竪穴住居跡出土遺物一覧

遺構No.	検出率	器種	器形	遺存率 %	口径			胎土	焼成	色調	底部地質	彩色地質		備考
					cm	cm	cm					内外面	赤彩	
SI-007	1	土器器	高杯	破片	(16.8)	<3.3>	-			2.5YR6/6 橙		内外面 赤彩	内外面付	

2 そのほかの遺構と遺物

土坑（第14・15・17～21図、第9・10表、図版9・10・15・16）

堅穴住居跡以外のものを一括して取り上げる。各遺構およびピットの法量については第9表に取りまとめてある。

SK-001はSI-001B号堅穴住居跡に近接して検出され、当初確認面より寛永通宝が発見されたため、近世の墓坑として調査が進められた。しかしながら調査が進むにつれて遺物が出土し、ほぼ床面に近い状態でも遺物が出土し（第10図）、奈良時代の遺構であることが知れた。基本的には円形、断面はやや袋状を示している。大きさとしてはこの時期の土坑としてはあまりみかけない大型のものである。杯2点と瓶1点、1は須恵器であるが胎土中に金雲母が大量に含まれ、灰色の地肌が目立っている。1とともに常陸産と思われる格子状の叩き目のある大瓶（4・5）が出土した。大瓶は十分に焼成し切れていない土師質のもので、5は煉瓦状に近いものである。

SK-002・003はSK-001と隣接して検出された。SK-002は掘り込みも浅いが同じく土師器が出土している。古墳時代後期であろう。

SK-005はSI-004A号堅穴住居跡の床面精査時に検出され貯蔵穴かとも思われたが、床面精査時の状況から堅穴住居跡とは別の遺構とした。しかしながら出土する土器は大きな時代差は感じられない。古墳時代後期のものであろう。SK-007からの杯はほかよりやや新しい時期になるか。奈良時代以降のものか。SK-008はSI-001B号堅穴住居跡の床面精査時に検出された。ほかの堅穴住居跡との関連がないため貯蔵穴などの可能性はなく単独のものとして判断した。時間的には縄文～弥生期にかけてのものとして推定される。

SK-009は長径135cmをはかる隅丸の方形を示す。掘り込みは72cm。遺物は杯あるいは高杯など破片ではあるが8点確認された。時間的には集落とほぼ同時期のものが主であるが、高杯は混入したものの可能性もある。

SK-011はSI-005が堅穴住居跡として廃絶以降ある程度埋まった状態になった時点で、掘り込みがなされ屋外炉的な使用がなされた可能性が考えられる。周辺から出土している土器も、現状ではSI-005号堅穴住居跡のものと考えてはいるが、土坑の掘り込み、焼土の広がりから、土坑に属する可能性も否定できない。

掘立柱建物跡（第17・18図、第11表、図版9・10）

SH-001、002は1間×2間の小型の掘立柱建物跡と想定されるものである。堅穴住居跡の柱穴のみかと考えたが、床面らしきもの、あるいはカマド又は炉なども周辺から検出されないため、小型の小屋状の建物として考えた。2棟ともに近接して検出されているが軸方向が異なり、必ずしも同一時期のものであるかは疑問である。周辺から出土した遺物で図示しえるものは1点のみであるが周辺のものとほぼ同一時期であろう。

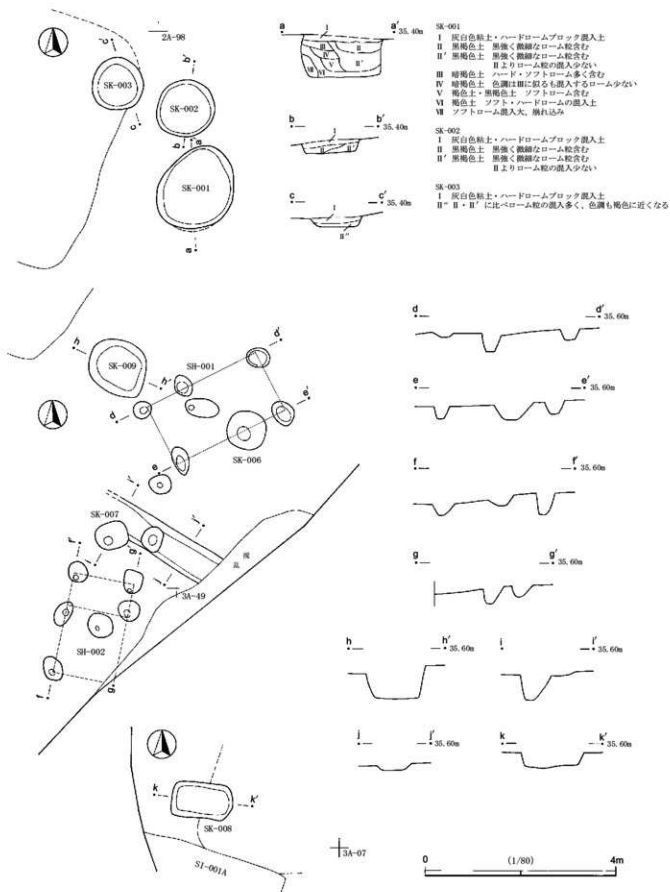
溝状遺構（第16図）

溝は一条検出されている。羽黒神社側からSI-007号堅穴住居跡の北側に平行してSI-004A号堅穴住居跡方向に流れる。掘り込みも攪乱などによりわずかに残るものであり、今回の調査のなかでは、その性格などについては検討するにたる資料は提示し得ない。

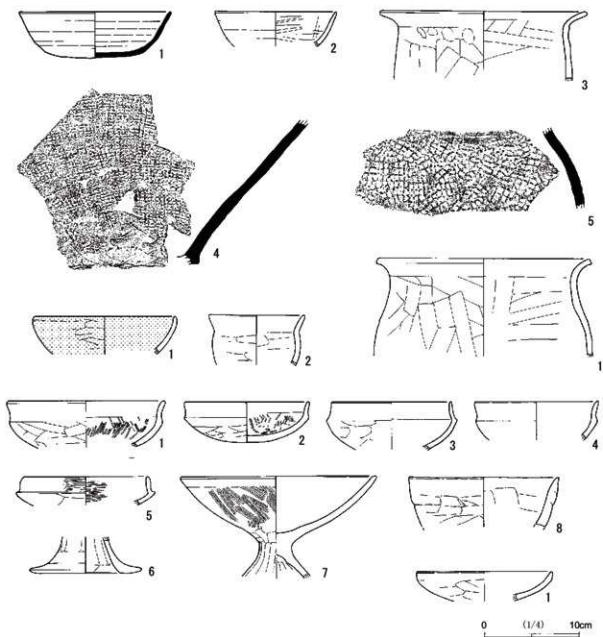
ほかには単独の柱穴状のものがほとんどである。中世から近世にかけてのもの可能性が高い。またこれらも遺構と関連しているか不明なものであった。

第9表 土坑一覧

遺構№	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	グリッド	備考
SK-001	楕円形	1.84	1.52	0.91	2A98	
SK-002	円形	1.21	1.19	0.34	2A98	
SK-003	円形	1.12	1.06	0.2	2A97	
SK-004	楕円形	0.98	0.81	0.19	3B01	
SK-005	楕円形	1.12	0.98	0.55	3A09	
SK-006	円形	0.87	0.86	0.4	3A39	
SK-007	楕円形	0.67	0.55	0.62	3A38	
SK-008	長方形	1.28	0.72	0.35	2A96	
SK-009	楕円形	1.35	1.16	0.72	3A28	
SK-010	長方形	1.87	1.12	0.34	2B81	
SK-011	不定形	2.06	0.64	0.43	2B90	
SK-012	楕円形	0.84	0.64	0.13	3A07	
SK-013	不定形	0.46	0.32	0.38	2B90	
SK-014	不定形	0.69	0.68	0.45	2B90	
SK-015	不定形	0.86	0.67	0.51	2B90	
SK-016	円形	0.41	0.36	0.19	2B90	
SK-017	楕円形	0.38	0.29	0.22	2B91	
SK-018	楕円形	0.42	0.38	0.11	3B00	
SK-019	長楕円形	1.01	0.53	0.37	3A09	
SK-020	楕円形	0.54	0.48	0.26	3B00	
SK-021	楕円形	0.34	0.29	0.55	3B01	
SK-022	楕円形	0.36	0.31	0.48	3B01	
SK-023	楕円形	0.54	0.44	0.17	3B10	
SK-024	楕円形	0.36	0.35	0.15	3B11	
SK-025	不定形	0.73	0.47	0.42	3A18	
SK-026	楕円形	0.41	0.34	0.35	3A28	
SK-027	楕円形	0.72	0.55	0.37	3A39	
SK-028	長楕円形	0.71	0.38	0.41	3A39	
SK-029	楕円形	0.49	0.39	0.32	3A38	
SK-030	楕円形	0.54	0.47	0.44	3A38	
SK-031	楕円形	0.58	0.49	0.34	3A48	
SK-032	円形	0.27	0.26	0.24	3A36	
SK-033	楕円形	0.39	0.36	0.28	3A36	
SK-034	楕円形	0.61	0.47	0.28	3A46	
SK-035	楕円形	0.27	0.26	0.18	3A46	
SK-036	楕円形	0.31	0.3	0.49	3A46	
SK-037	楕円形	0.44	0.41	0.45	3A46	
SK-038	楕円形	0.6	0.46	0.58	3A47	
SK-039	楕円形	0.41	0.31	0.2	3A56	
SK-040	楕円形	0.29	0.26	0.13	3A56	
SK-041	楕円形	0.34	0.23	0.22	3A56	
SK-042	楕円形	0.31	0.26	0.27	3A56	
SK-043	長楕円形	0.3	0.16	0.21	3A56	
SK-044	楕円形	0.39	0.31	0.23	3A57	



第17図 土坑及び掘立柱建物跡など



第18図 土坑及び掘建柱建物跡周辺出土遺物

第10表 土坑出土遺物一覧

遺物No.	押込No.	器種	形状	遺存度 %	口径 cm	高さ cm	底径 cm	胎土	焼成	色調	底層処理	彩色処理	備考
SK-001	1	直器部	杯	45	(16.0)	4.8	-	赤褐色多々含む					内外面均等、底面均等
SK-001	2	土器部	杯	破片	(12.7)	<3.6>	-			10706/4 にぶい黄褐色			外面均等、内面均等
SK-001	3	土器部	甕	口縁部～ 体部 25	(21.6)	<7.3>	-	砂粒含む		5706/6 褐色			口縁部均等、外面均等、 体部内面均等
SK-001	4	直器部	甕 or 鉢状	破片	-	15.4	-	砂粒含む		7.5706/4 にぶい褐色			外面均等、内面均等
SK-001	5	直器部	甕	破片	-	9.2	-	砂粒、黄褐色の 器母を含む					胎土濃い、二次焼成
SK-002	1	土器部	甕	口縁部～ 胴部 25	(22.3)	<10.3>	-			5706/6 褐色			口縁部均等、体部外面均等、 体部内面均等
SK-005	1	土器部	杯	70	(13.2)	4.6	丸底			7.5705/4 にぶい褐色			口縁部均等、外面均等、内 面均等、断面均等
SK-005	2	土器部	杯	18	(15.2)	<4.3>	-			7.5706/6 褐色			口縁部均等、外面均等、内 面均等
SK-005	3	土器部	杯	15	(12.5)	<3.55>	-			7.5706/4 にぶい褐色			口縁部均等、外面均等、内 面均等
SK-007	1	土器部	杯	破片	(14.9)	<5.0>	丸底			5706/6 褐色		内外面 赤彩	外面均等、内面均等
SK-007	2	土器部	小型甕	破片	(10.0)	<5.2>	-	砂粒含む		7.5706/6 褐色			口縁部均等、体部外面均等、 体部内面均等
SK-000	1	土器部	杯	口縁部～ 体部 20	(16.5)	<4.9>	-			10705/2 灰黄褐色			口縁部均等、外面均等、内 面均等
SK-009	2	土器部	杯	35	(13.0)	4.3	-			7.5706/6 褐色			口縁部均等、外面均等、内 面均等
SK-000	3	土器部	杯	口縁部～ 体部 20	(12.0)	<5.0>	-			7.5706/6 褐色			口縁部均等、外面均等、内 面均等
SK-000	4	土器部	杯	破片	(13.0)	<4.0>	丸底			7.5706/6 褐色			断面均等
SK-000	5	土器部	杯	破片	(13.0)	<3.0>	丸底			7.5706/4 にぶい褐色			口縁部均等、外面均等、内 面均等
SK-000	6	土器部	高杯	胴部～ 底 40	-	<3.8>	(11.8)			7.5706/6 褐色			内外面均等
SK-000	7	土器部	高杯	破片	(20.5)	<10.8>	-			7.5706/6 褐色			口縁部均等、体部外面均等、 断面均等、均等、体部内面均等
SK-000	8	土器部	鉢	破片	(15.8)	<5.2>	-	石灰粒、器母等 含む		2.5705/6 明赤褐色			口縁部均等、体部外面均等、 輪郭均等、体部内面均等
SK-010	1	土器部	甕	破片	(14.0)	<3.2>	-			7.5706/6 褐色			口縁部均等、体部外面均等、 体部内面均等
SK-011	1	土器部	甕	破片	(13.8)	<2.9>	-	砂粒含む		2.5704/8 赤褐色			断面均等、二次焼成、断面も ろい
SK-011	2	土器部	甕	破片	(17.0)	<5.5>	-	砂粒含む		2.5704/6 赤褐色			口縁部均等、体部外面均等、 体部内面均等

第11表 掘立柱建物跡・遺構外出土遺物一覧

遺物No.	押込No.	器種	形状	遺存度 %	口径 cm	高さ cm	底径 cm	胎土	焼成	色調	底層処理	彩色処理	備考
SI-002	1	土器部	杯	破片	(14.2)	<3.1>	丸底	砂粒含む		7.5705/6 明褐色			口縁部均等、外面均等、内 面均等
SI-0019	7	弥生土器	甕	-	-	-	-			10705/3 にぶい黄褐色			遺構外
SI-0019	8	弥生土器	甕	-	-	-	-			10707/6 黄褐色			遺構外
SI-0020	10	弥生土器	甕	-	-	-	-			10705/4 にぶい赤褐色			遺構外
SI-002C	1	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	砂粒、器母粒		10705/2 灰黄褐色			遺構外
SI-002C	2	縄文土器	甕	-	-	-	-	砂粒含む		10705/3 にぶい黄褐色			遺構外
SI-002A	11	弥生土器	甕	-	-	-	-	砂粒含む		5706/6 褐色			遺構外
SI-002C	3	縄文土器	矢筈土器	底破片	-	-	-	砂粒含む		7.5706/6 褐色			遺構外
SI-004A	9	弥生土器	甕	-	-	-	-			7.5705/6 明褐色			遺構外
SK-006	5	弥生土器	甕	-	-	-	-			10707/6 明赤褐色			遺構外
SK-006	6	弥生土器	甕	-	-	-	-			7.5707/6 褐色			遺構外
SK-030	4	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	砂粒含む		7.5705/6 明褐色			遺構外

3 石製品及び鉄片 (第19～21図)

石製品 (図版 16 上)

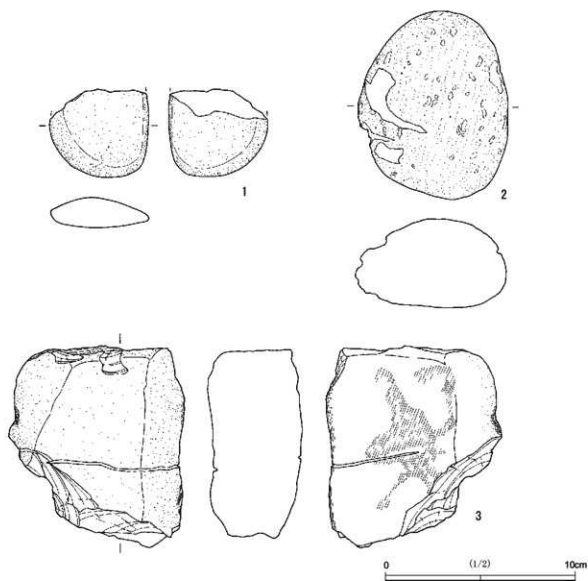
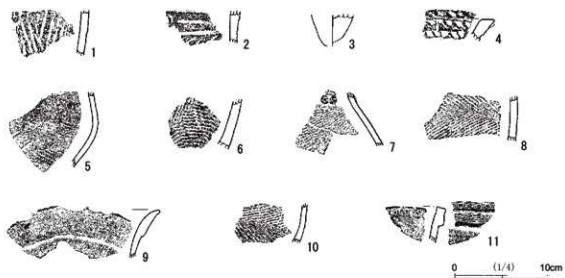
1は安山岩製、2は軽石の磨石(敲き痕あり)である。縄文時代の可能性が高いものである。

第20図における4・5・7・8も古墳時代の竪穴住居跡などからの出土ではあるものの磨石、敲石といったいわゆる縄文時代の遺物とするのが妥当であろうか。9・10は砂岩質、いわゆる筑波石といわれるものか。すでに調査されているとされた古墳のほかに、今回の調査区に近接して古墳が存在することになってはいたが、墳丘、周溝ともにその存在が確認できなかった。ある時期何らかの事情で破壊されている可能性も否定できず、石室などの破片である可能性も否定できないものである。

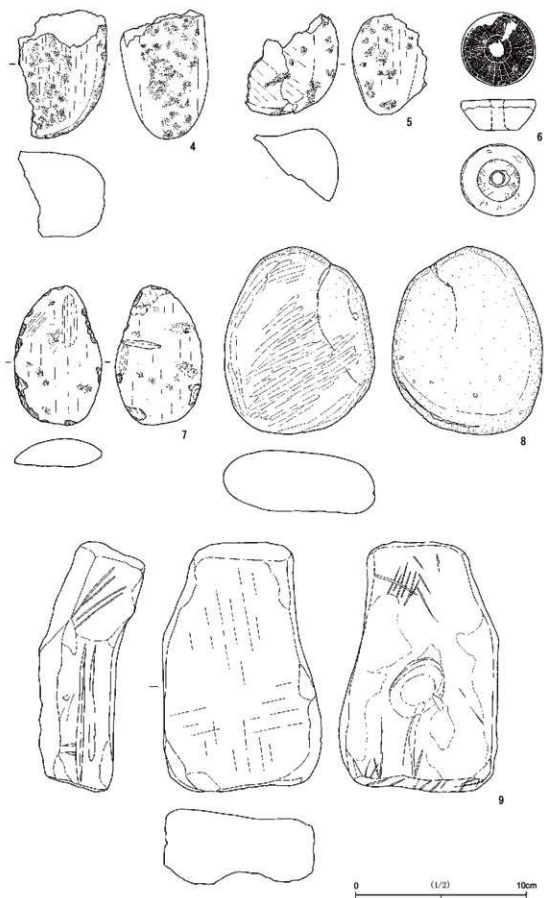
13・14は砥石と考えられる。これらは古墳時代の遺物として考えてよいかも知れない。16～19は滑石製の有孔円板である。竪穴住居跡あるいは土坑からの検出である。15は全面に使用痕の残る砥石または磨石であろうか。脇面のすり減り方からして金属器による可能性が高いと考えられるため出土した竪穴住居跡と同時期のものとする。

鉄片 (図版16下)

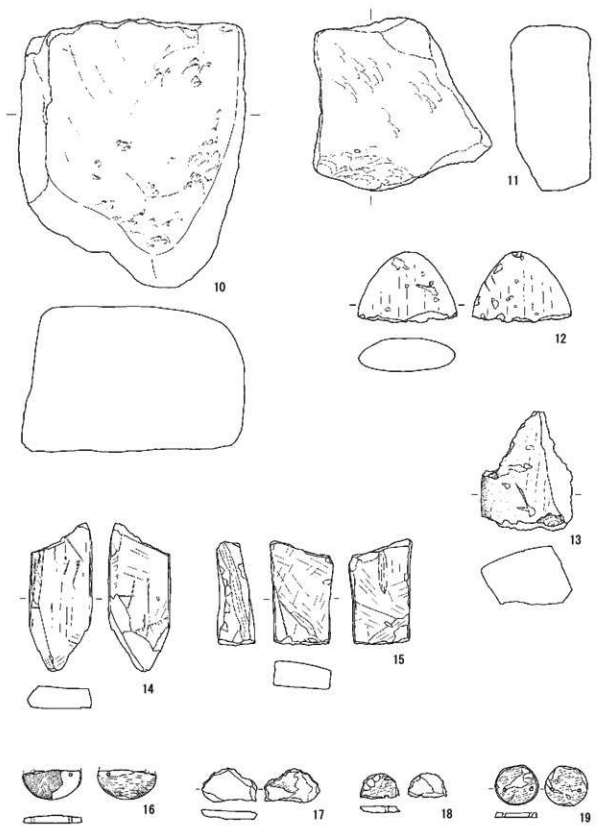
正確にはなんと称してよいかわからない。曲面がなく鉄鍋などの可能性は低い。厚さは現状で3mmである。素材としての鉄板であったものかも知れない。遺構内より野鍛冶に関わる可能性のある遺物もみられたため今回調査区以外に製鉄関連遺構が存在する可能性を指摘しておく。



第19図 遺構外遺物及び出土石製品 (1)



第20圖 出土石製品 (2)



第21图 出土石製品(3)

第3章 まとめ

香取海に面する台地上には数多くの遺跡・古墳が存在し、古代史を検討する上で重要な遺跡が調査されずに残されている、あるいは失われた可能性がある。

本遺跡直下を通る道は、古代における東海道支線、いわゆる香取路として考えられる道である。栄町の龍角寺周辺の埴生郡衙（大畑遺跡）より利根川の台地直下の微高地を通り香取へ向かう道筋である。旧下総町（現成田市）龍正院付近には奈良時代の瓦窯跡や大和田玉造遺跡などが存在し、郡衙へと続く。

図版1の航空写真と照らし合わせると、川に面する地形に大きな変化があることが見て取れる。航空写真は昭和42年撮影のものであるが、この当時はまだ本来の地形と大きく変わることなく、また古代から続くであろうこの道も現在と変わることなく示されている。

先にも述べたが、当遺跡地周辺ではこの道のとおる台地下の微高地にも数多くの古墳が残されており、耕地整理や土取り、あるいは利根川の氾濫などにより失われたものをも考えればかなりの数が存在したものと考えられる。

1 隣接遺跡について

千葉県埋蔵文化財分布地図によれば、本遺跡の所在する台地上には古墳が数基あるとされ、うち1基が土取りにより調査されたとあるが、報告書の刊行には至っていないとのことであった。現地にある羽黒神社の総代の話によると2基程度が残されており、台地上に現存するという話であったが、荒れ山となっており立ち入ることができない状態であったため、調査時点では確認することはできなかった。

周辺の古墳例は4世紀代とされる前期古墳が大賀賀川流域に所在することが知られ、羽黒遺跡後背台地に所在する堀込遺跡からは7世紀代、終末期の古墳が調査されており、各期において数多くの古墳が存在することが知られている。

古墳時代の前半期、この地域の特徴的な事例として石枕を出土する古墳の存在があげられる。

第22図に改めて羽黒遺跡を中心として石枕を出土した古墳を明示してみると、利根川（香取海）を望む樹枝状の台地先端に位置する多くの古墳から出土している状況が見て取れる。

現在まで神崎町町内だけで9例、出土地不詳をも数量に含めるならば12例以上が当遺跡周辺から出土している。



第22図 石枕出土古墳分布図 (S=1/6500)

北西につながる旧下総町（現成田市）内からは7例、佐原方面に進めば佐原市大戸宮作2号墳、同山之辺手ひろがり3号墳、同堀之内1号墳などと香取路に沿って5例を数え、神崎町を中心に22例以上の出土がみられる。この地域のみで、全国で約110例といわれる出土例の2割（千葉県だけで55例）を占めているという特異性があげられる。また、この香取の海の対岸である現霞ヶ浦周辺からも12例の出土が知られることから、当地域が石枕を用いた古墳の東国における中心域であったであろうことが推定できるものである。

出土する石枕の年代としては、香取市（旧佐原市）山之辺手ひろがり3号墳のものが5世紀初めの頃のものだとされ、この地域においては最も古いものの一つに数えられている。当遺跡に隣接する北の内古墳においては実年代としては5世紀後半、6世紀の近くに位置づけられており、大須賀川をはさむ対岸地域に存在する禪昌寺山古墳のものが6世紀の前半とみられて、最もこの地域では新しい時期のものであるとされている。その後も古墳の造営は連綿と続くものの、石枕を持つ古墳はおおむね6世紀前半に姿を消してゆく。一方、周辺に存在する集落跡はどうであろうか。

羽黒遺跡と同一台地上に立地したと考えられる仲台遺跡に関しては、1989年12月から翌年2月までの間、香取郡市文化財センターにより発掘調査が実施され「仲台遺跡」（財）香取郡市文化財センター埋蔵文化財調査報告36集（1995）として刊行されている。

この報告書によると宅地造成により6,500㎡が調査対象となり、縄文時代早期から弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代にいたる集落の調査が行われ、堅穴住居跡52軒、掘立柱建物跡2棟、溝17条、道路跡1条などが調査されている。

仲台遺跡の主要な時期である古墳時代から奈良・平安時代にかけては今回調査された羽黒遺跡とほぼ同一の時期となり、遺跡名こそ異なるものの隣接する集落として、あるいは同一ともいべき密接な関係にあったものと考えられる。第2図では土取りなどで両地点の関連は明瞭ではないが、航空写真でみると両遺跡は同一の台地上に位置するものとなっていたと想定できる。

仲台遺跡においては当遺跡と同じく縄文時代早期、燃糸文期～沈線文期より居住地としての利用が開始され、弥生時代、そして古墳時代後期に最も集落規模が大きくなり、奈良・平安時代へと時代が下るにつれ集落としての存在が小さくなってゆくということが提示されている。遺物を検討すると当調査地点より時期が若干下下と思われる状況である。しかしながらこれらの古墳を持ったであろう古墳時代前期～中期とされる遺構は少なく、本遺跡においては面積的にも狭小であるためこのような集落変遷は検討する余地はないが、古墳時代後期を中心として集落の形成がなされており、同様な傾向であったものと考えられよう。

そのほか、同一台地または隣接台地上の遺跡としては、成城台団地建設により調査された立野遺跡（未報告）において奈良・平安時代の堅穴住居跡14軒、堀込遺跡（1989）方墳2基、堅穴住居跡2軒が調査されているということである。この2遺跡は台地の基部ともいべき位置にあり、樹枝状に伸びる台地の最先端にある羽黒遺跡とは、ともに一つの集落と見なしうるべき存在であろう。また、この立野・堀込遺跡を起点（手の手首とすると、羽黒遺跡は指先）として樹枝状に利根川に向かう一つの台地上には北の内古墳が、そして最も西側の枝には遠台遺跡というように、巨大集落が存在し、そのなかのいまだ未調査区域に「香取郡衙」が残されているものと想定することが可能かもしれない。

香取郡に関連すると想定される集落としては大須賀川をはさんで対岸にある大平遺跡があげられる。大

平遺跡（1987）では古墳時代後期から平安時代の竪穴住居跡104軒が検出されている。その7割が当遺跡とほぼ同時期のものである。また周辺の遺跡からも当該時期の遺物が採集されるなど、大規模な遺跡の存在が予想されると同時に、この周辺地名は「武田」となっており、古くから『和名類聚抄』に記される下総国香取郡六郷のうち「健田郷」に比定されている地域である。

「郡」であるが「旧郡村」として古来より香取郡衙推定地と考えられている。字「郡」とつく地名の中心地とは約北西に1km以内と隣接しているともいえる距離にあり、また郡衙を中心とする大集落群が展開している様子がうかがえる。

2 古代の羽黒遺跡について

さて、当遺跡より約2.5kmの距離に神崎神社（小（子）松社）はある。神崎町はこの神社を中心として成立したといってもよいだろう。神崎（神前あるいは小松社）神社（国史見在社）の祭神は鳥之石楠船神（とりのいわくすふねのかみ）または天鳥船命（あめのとりふねのみこと）である。香取神宮の神経津主神と鹿島神宮の祭神武甕槌神が大己貴命と国譲りの交渉をした際、ともに事代主神のもとへ使わされた神とされており、また天鳥船は神が乗る船とされることから、この地においては古代から海上交通の要所として船の神を祭っていたと考えられる。（子（小）松神が神崎神社の前身名称とされる。神崎神社に改称は明治期とされる。）

現・神崎神社の創建は社伝によると白鳳2年（673年）、常陸と下総の境界にある大浦沼の二つ池からこの地に遷座したという。この前年の672年に「壬申の乱」が中央では起る。

大海人皇子はこの乱に際し東海道・東山道の軍に動員をかけている。そしてこの乱に勝利をおさめた大海人皇子はこの年「673年」に「飛鳥浄御原宮」において「天武天皇」として即位を行うなど、中央のみならず東国においても大きく揺れ動き、また地方の支配者である地域豪族間においても大きな変動が起こった可能性があり、この遷座もその一つの反映として行われたものと考えられることができるかも知れない。

神社自身の存在を示した歴史資料としては、200年後に『日本三代実録』（陽成天皇）元慶3年（879年）4月5日に、「下総国正六位上の子松神に従五位下を授ける」と記載されており、その存在が裏付けられる。

また、承平2年（932年）には勅定（朱雀天皇）により下総国司による社殿の修造がなされ、その節に社領として26町の田畑が寄進されたと伝えられている。今回までに平安時代の大集落の検出が周辺においてなされていないが、26町の田畑という相当数の集落規模をその背後に持つであろうことが推定される。その集落がいずれにか存在することに注意しておかなければならない。

この時期、神崎の「渡し」としての存在が意外なところで歴史上にあらわれる。社殿の改修後4年目の承平6年（936年）は平氏一門の争いとして知られる平将門の乱にあたり、平良兼は「下総国香取郡之神前」に出て「^{わた}渡」より渡し、常陸国信太部（現茨城県稲敷市信太古渡）に至ったことが『将門記』に記されている。

ここに記される「神前」とは現在の「神崎神社」またはその周辺に比定されており、この記載から神崎には、下総より対岸の常陸国稲敷郡方面に渡る渡し場が整備されていた可能性（しかも、それなりの軍勢を渡す能力）があったものと考えられよう。

（将門記「下総国香取郡之神前。自^{わた}渡着常陸国信太部其崎前津。」）それは古くは古墳時代から、本遺跡から出土する土器の中に常陸方面から供給されたと思われる土師器・須恵器の存在することからもその

流通と交流を知ることができることからいえるだろう。

このように神崎神社は創建も古く社格も従五位下と相応でありながら、『延喜式神名帳』（延長5年（927年））に未記載の式外社である。（式外社自体は当社以外にも数多く存在しており、著名なところでは香椎宮、岩清水八幡、八坂神社、北野天満宮などがあげられる。）

これは延喜式の選定においては寺が主となり管理しているものや、あるいは『延喜式』を編纂した藤原氏系において意に沿わない氏族の系列の神社などが意図的に除外されているという事例もあることから、当地においては鹿島・香取系ではない別の氏族が主勢力の地域であったことを想定しうるのである。

元来、香取神宮の大宮司は香取氏を称しており、香取大系図によれば、香取氏は神宮祭神である経津主命の子苗益命を祖とする。

すなわち香取神経津主命の神裔であるとしているが、豊佐登のとき香取連を賜り、その五代後胤、五百島は大中臣氏から養子を迎えて、香取姓を改めて中臣姓を称するようになった。また佐原市史によれば、もともと香取の神は物部系であったものの、祭神を中臣氏系の経津主神として早い時期から中臣系と連携していったとしている。

それらを考えるならば、同じ香取郡内において、国譲りに関わる3柱としてともに働いた鹿島・香取神と目と鼻の先にありながら、『延喜式』から除外される関係ということは興味深いものがある。その視点からみると、『延喜式』においてこの香取の海周辺において同神を主として祭る神社は常陸国石船神社（創建年代不詳）が知られる。新編常陸国誌によれば鹿島の神との関係から鹿島郡内に祭られたとある点から考えると、常陸に向かう方が、藤原（中臣）氏系列の旧来の勢力圏としえるだろうか。

ちなみにこの神を主祭神として祭る神社は全国的にも少ない。主に当地をはじめとし、利根川縁辺にみられるとされる。少ない例のなかに東京にある墨田川神社がある。常陸国信太郡の浮島（現稲敷市桜川）から遷されたともいう説があり、神社の縁起にも亀に乗って流れ着いたといわれている。この神の国移りの事例などを考えるならば、それらの事例が古代における当地周辺の支配勢力の変遷およびその時期について考える一助となるかも知れない。

その時期は大化の改新後、中臣氏が中央で実権を握るなかで、香取郡が香取神宮の神郡となった時期（大化5年・649年）、神が香取の海を渡ってきたであろう時期と文献に現れた時期、社格の向上および国司による社殿の改修などの時期が一つのポイントであったのかも知れない。

その後、この神崎の地は平安時代後半になると香取神宮大瀨宜家の知行となり完全に香取領となる。応保2年（1162年）大瀨宜家の知行として相続が行なわれ、知行と併せて神崎神社の宮司職が大瀨宜家で世襲されるようになる。

平安時代末期から室町時代にかけての香取神宮文書や鹿島神宮文書には「海夫」とよばれた集団の存在が記されている。それによると海夫は香取社大瀨宜（ねぎ）や鹿島社大宮司の支配下にあり、神祭物を納める代替として漁業や水運などの特権が認められていた。それは鹿島・香取の両神宮が河口に面し、神崎神社が一段奥で常陸への渡し場として、扇の要様の位置に所在するということから、水上交通の一つのキーワードとして香取神宮勢力により多くの地域権力の集約がなされたと考えられよう。

これらの変遷は先に記したように元慶3年（879年）また承平2年（932年）において神崎神社が歴史資料に現れる時期をそれぞれの転換点とし、ついには神崎神社が香取神宮により完全に末社化され神宮領となることでその支配の転換が完成するのではないだろうか。

その支配が確定するとともに、平安時代末期には摂関家(近衛)へ神崎神社領を寄進してその庇護下に入り、「神崎荘」が成立して中世に向かうのである。

参考文献

- 佐原市史 1966 佐原市
日本地名大辞典 1984 (株)角川書店
石器時代における利根川下流域の研究 西村正衛 1984
神崎町史 資料集Ⅰ 1985 神崎町
千葉県神崎町 大平遺跡 1987 神崎町教育委員会
神崎町南部遺跡群発掘調査報告 1989 神崎町教育委員会
下総町史 原始古代・中世編 資料集 1990 下総町
事業報告Ⅰ～ⅩⅤ 1992～2005 (財)香取郡市文化財センター
千葉県埋蔵文化財分布地図(2)ー香取・海上・匝瑳・山武地区(改訂版)1997 (財)千葉県文化財センター
千葉県の歴史 資料編 古代3 1998 千葉県
堀込Ⅱ遺跡 1999 (財)香取郡市文化財センター
常総の内海をめぐる石枕と立花の時代 2002 白井久美子 千葉大学考古学叢書2
千葉県の歴史 資料編 古代2 2003 千葉県
千葉県の歴史 資料編 古代4 2004 千葉県
北の内古墳 2004 (財)香取郡市文化財センター
仲台遺跡 1995 (財)香取郡市文化財センター
古墳に眠る石枕(図録) 2011 千葉県教育振興財団

写 真 图 版



郡遺跡



羽黒遺跡遠景（北より）



遠景（東より・郡遺跡中央台地）



土取り削平状況（西より）



利根川・北の内古墳方面遠景



遺跡近景北面を望む

遺跡遠景・周辺状況



1. SI-001号竪穴住居跡遺物出土状況（北から）



2. SI-001B・C・D号竪穴住居跡全景・遺物出土状況（東から）

図版4



1. SI-001A号竪穴住居跡完了



2. SI-001A号竪穴住居跡カマドセクション



3. SI-001B号竪穴住居跡遺物出土状況(西から)



4. SI-002A・B・C号竪穴住居跡全景(北より)



1. SI-002A 号竪穴住居跡全景



2. SI-002A 号竪穴住居跡カマド遺物出土状況



1. SI-002B・C号竪穴住居跡全景（北から）



2. SI-002C号竪穴住居跡遺物出土状況（北東部）



3. SI-002C号竪穴住居跡杯集中出土状況



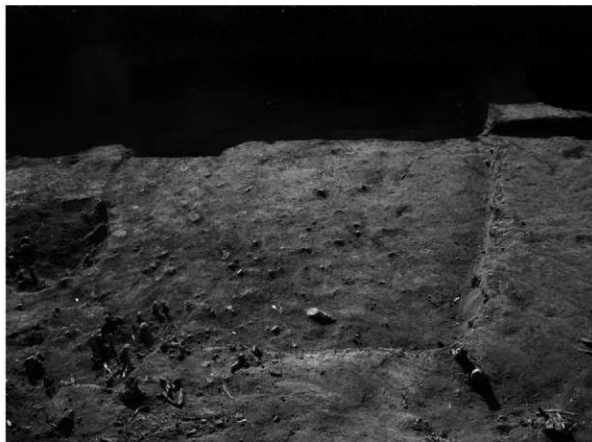
4. カマド付近遺物出土状況



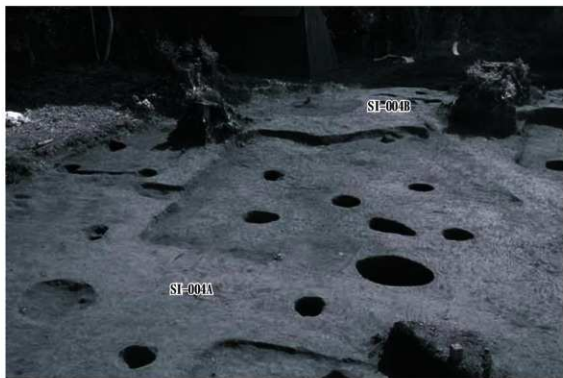
5. 南壁付近遺物出土状況



1. SI-003A・B・C号竪穴住居跡全景（北から）



2. SI-003B号竪穴住居跡全景（東から）



1. SI-004A・B号竪穴住居跡・SI-007号竪穴住居跡全景（北から）



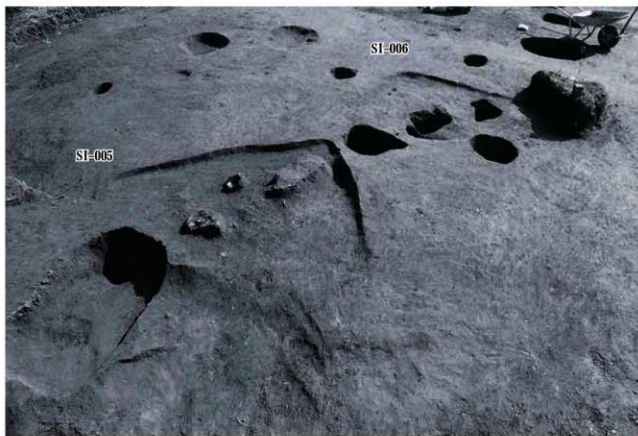
2. SI-004A号竪穴住居跡遺物出土状況（北から）



3. SI-007号竪穴住居跡近景（北から）



4～6. 遺跡調査風景



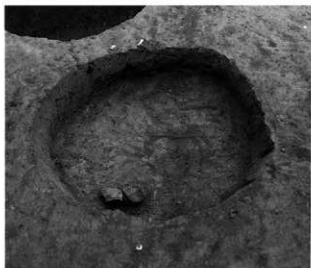
1. SI-005・006号竪穴住居跡全景（北から）



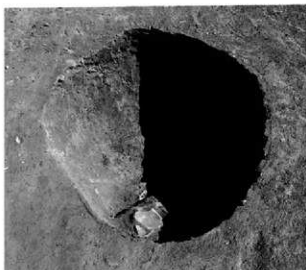
2. SH-001・002ほか土坑群（北から）



1. SK-001



2. SK-002



3. SK-005



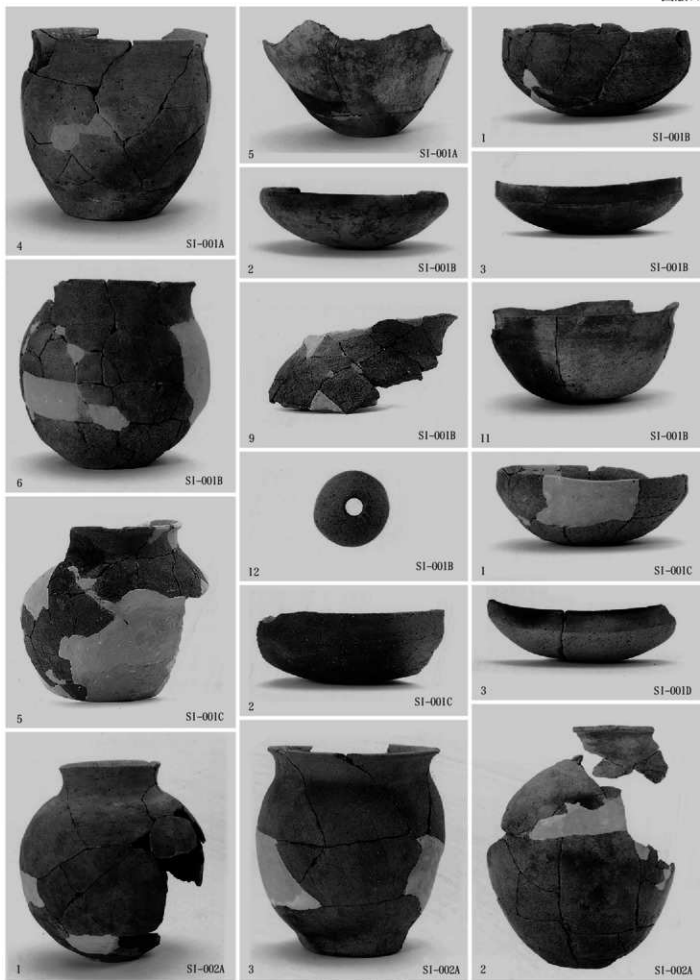
4. SK-008



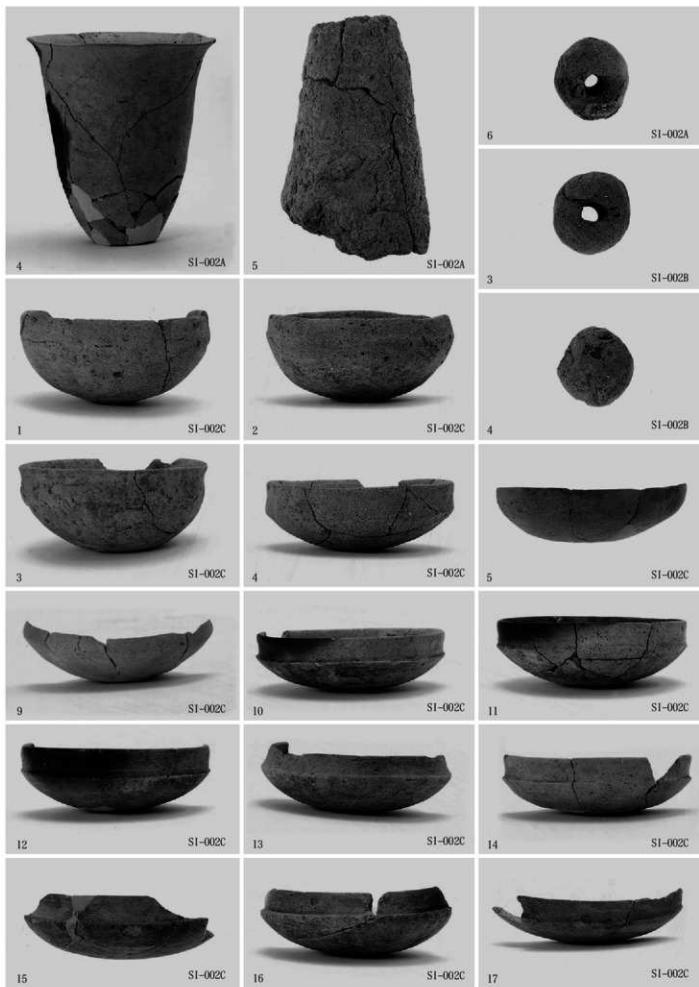
5. SH-002



6. SK-011



羽黑遺跡出土遺物(1)



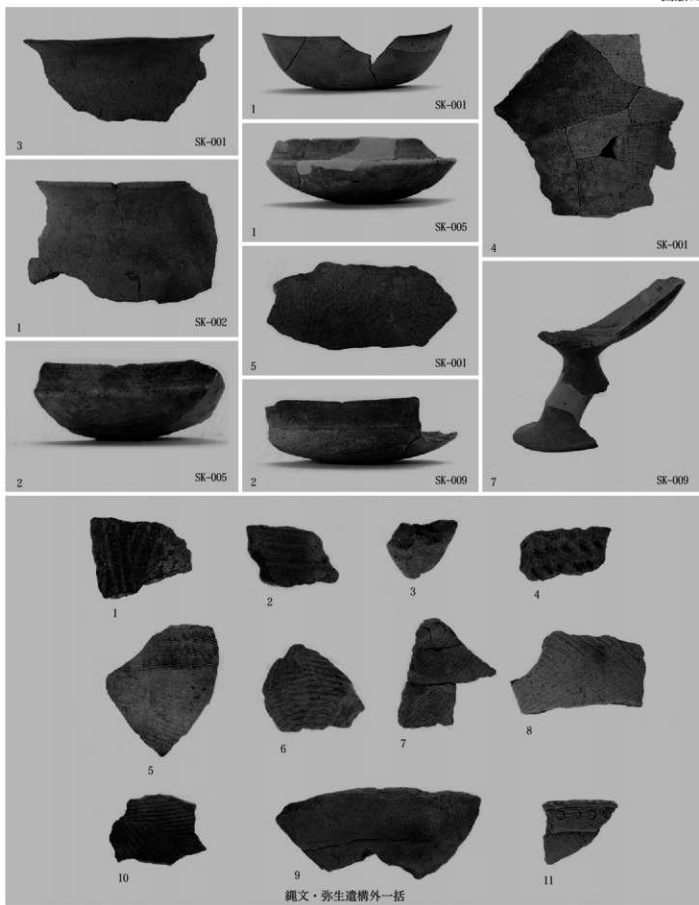
羽黑遺跡出土遺物（2）



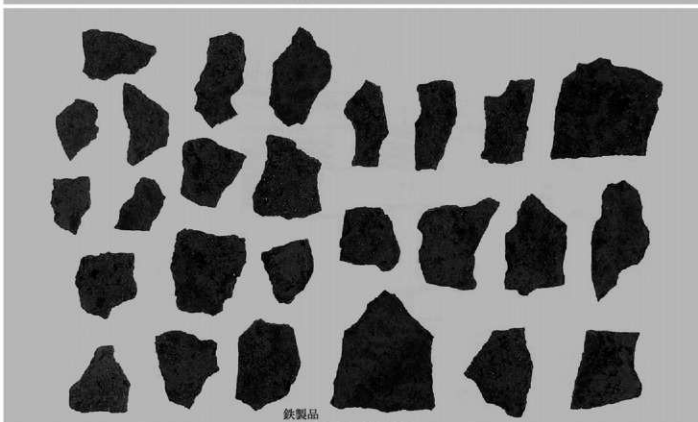
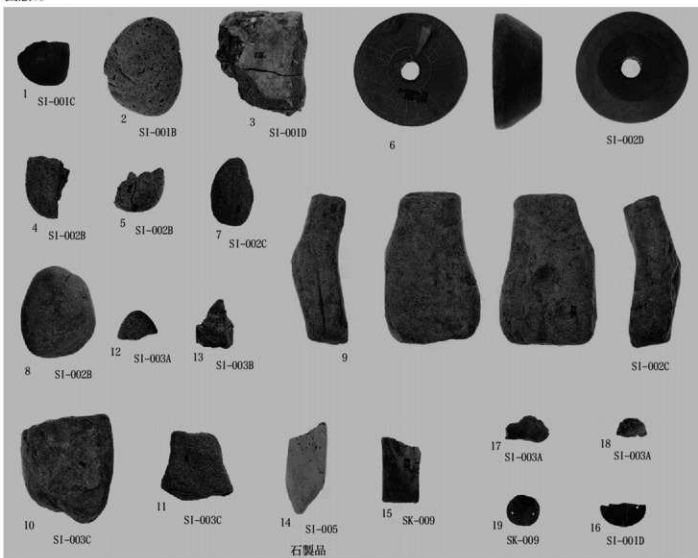
羽黒遺跡出土遺物 (3)



羽黑遺跡出土遺物（4）



羽黒遺跡出土遺物（5）



羽黑遺跡出土遺物(6)

報告書抄録

ふりがな	こうざきまち はぐろいせき							
書名	神崎町羽黒遺跡							
副書名	県単道路改良（一般）委託埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第678集							
編著者名	池田 大助							
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡 809 番地の 2 TEL 043-424-4848							
発行年月日	西暦 2012 年 3 月 15 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		経緯度		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
はぐろいせき 羽黒遺跡	かとりてんこうざきまちおおぬき 香取郡神崎町大貫 1165-2 ほか	12342	342-002	35 度 53 分 26.5 秒	140 度 25 分 10.6 秒	20110808～ 20111005	700 m ²	県道郡停 車場大須 賀線建設 のため
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
羽黒遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代	竪穴住居跡 15 軒 掘立柱建物跡 2 棟 土坑 15 基		縄文土器 弥生土器 古墳時代土師器、奈 良・平安時代土師器、 石器、石製品			
要約	利根川に面した標高 39m の台地先端部に立地する、古墳時代後期を中心とする集落跡を確認した。縄文時代～弥生時代にかけての遺物は出土したものの遺構は発見されなかった。							

千葉県教育振興財団調査報告第678集

神崎町羽黒遺跡

－県単道路改良（一般）委託埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成24年3月15日発行

編 集 財 団 法 人 千 葉 県 教 育 振 興 財 団
文 化 財 セ ン タ ー

発 行 千 葉 県 県 土 整 備 部
千 葉 市 中 央 区 市 場 町 1-1

財 団 法 人 千 葉 県 教 育 振 興 財 団
千 葉 県 四 街 道 市 園 渡 809 番 地 の 2

印 刷 株 式 会 社 東 プ リ
船 橋 市 咲 が 丘 1-11-9
